
～ 猫被り姫に魔王退治の王子様 ～

かとう みき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～猫被り姫に魔王退治の王子様～

【Nコード】

N6208X

【作者名】

かとう みき

【あらすじ】

～12/27並び替え他工事中～

東国の姫が魔王に掠われた。婚約者の王子は姫を救うべく魔王退治の旅に出たが…。魔王と姫の両方を救いたいと言う旅の道連れが存在に、王子は姫に恋する気持ちも不安定になり。掠われた筈の姫は魔王と互いに惹かれ合いつつも素直になれない日々。姫は立場故に、魔王はその罪がケガレを喚ぶ故だった。

（王子BL注意少しだけ不埒）

完結予定日：2011年…最悪年内。

一応年内に終了させて、いつか全面改稿するかもです。↑2011
/12/25以降一部加筆修正と並び替えています。

以下25日以降の加筆部分と新規UP分

「黒の王子」「〵誕生〵創世の神」「夜闇の誘惑」「秘め事」

夜闇話は書き方迷って保留してましたが、ラスト近くなってそうも云ってられなくなりました……。頑なな燕夜の「私は汚れている」発言の源です。

神話　↳誕生↳創世の神

リア・リルーラの誕生には諸説ある。

最古の女神と喚ばれ、総ての世界と命を生んだとされ乍ら、14番目の月で生まれたともされる。

17番目の月もまた同様の矛盾を抱える。

原始の初めより存在した唯一の月であるのに、17番目に生まれた月と呼ばれる。

また創世の三柱にも謎は残る。創世の神々は永遠の存在とされるが、その内主月神は代替わりを重ねる。しかも、四代目の主月神こそが創世の神と喚ばれるのだ。

創世にはリア・リルーラ、主月神、そして夜闇の神セルストが坐す三柱と喚ばれる。

初めに、リア・リルーラが存在した。

そこに混沌を生み。女神は混沌に白き織手を閃かせた。

女神は最初に、二柱の神を生んだ。

初代主月神と夜闇の主セルスト神である。

女神の誕生を祝う月、白華が生まれたのはこの時だ。

夜闇の神は生まれ落ちると共に、女神に慶賀を述べた。

『無事にお生まれになられた事お慶び申し上げます。我が娘にして、我が母なる女神よ。』

リア・リル―ラは頷いた。

『蛇にして林檎。父にして息子。そなたの誕生も、また慶ばしきものの。』

『ならば私は蛇として行きましょう。この混沌を戴けますか？』

セルスト神は二柱が生まれた後の、混沌の残骸を齧った。

セルストが混沌を飲み込むと、それまでは優しい穏やかなばかりだった夜が、恐怖と冷たく昏い闇を生んだ。そこから淫らな性や蠢く化性、熱く燃ゆる憎悪と執念が生まれた。

『すべて喰らったのか！まだ沢山の命をその混沌から生めたのに！』

主月神は闇の身勝手を歎いたが、責めはしなかった。

それは「決まって」いた事でもあったからだ。

そして二柱は世界を、神々を、沢山の命を創造し生み揃えた。何を創り、何を生めば良いか、二柱は既に承知していた。

二柱は最初に月神達を生んだ。13の柱を生み、20の大神を生んだ。

それらは二柱を扶け、世界の創造を手伝った。

夜闇は永遠だったが主月神は次代を生んだ。
それもまた「決まって」いた事だった。

次代はまた次代を生み。
或る日、4代目主月神と成る、シ・エンが生まれた。

子供の姿で生まれ、しかも子供の精神を持つ主月神など初めてだった。

さざめく神々を他所に、混沌に生まれたとされる、二柱、十三の柱、二十の柱、この始めの神々は当たり前前の事とした。

力と知識を持つ始めの神々の静観に、周囲も落ち着きを取り戻す。
「そういうもの」なのだと言状は受け入れられた。

シ・エンは14番目の月に宮を置いた。
或る日、夜闇の神々が歌い上げる。女神の到来を。

夜闇の王セルスト神が囁いた。

『女神は傷ついているよ。月水を持って行って差し上げよう。』

リア・リルーラがどうやったら傷を負うと云うのか。
疑問にさえ感じない幼い神だった。

シ・エンは驚き、夜闇の云う通りにした。

果たして、リア・リルーラが顕れた。
もちろん、リア・リルーラに外ならない。

だが、常とは違う姿にシ・エンは目を瞠った。
違う姿の女神に、本来の名を喚びかける訳にはいかない。シ・エンは解答を求めて夜闇を見上げた。

『ああ。違うお姿だねえ。ならば「お姉ちゃん」と呼んでご覧。」「怪我をしているね？このお水を飲んで？楽になるから。」「そう云って、月水を差し上げるんだ。』

シ・エンはそうした。

月水は少女を壊す。

セルストは笑い、少女の姿を抱きしめた。

そして、少女は声に成らぬ悲鳴を上げた。

肌がひび割れ、裂けた間から濾過ろかに濾過を重ねた純粋な月光が閃光となって吹き出した。

先ずは、その裂けた肌を闇で覆い隠したセルスト神を、刃と化して貫いた。

閃光は沢山の刃から爆発に代わり、総ての世界と命を巻き込んだ。

そして。

リア・リルーラがそこに生まれていた。

リルーラが混沌を生み、二柱を生み、セルストが慶賀を述べる。

いま一柱。リルーラの誕生に手を貸した神は姿を顕さない。
まだ生まれるには早いから仕方が無い事だった。

一瞬の閃光にシ・エンの眸が眩んだが。
少女の姿が、セルストの闇の衣に隠れたのは見て取れた。

そして。

闇のベールが剥がれ、光り輝く肌が覗く。

リア・リルーラが本来の姿で微笑んでいた。

シ・エンは彼女の傍に居たいと感じた。
リア・リルーラの紫月の眸が瞬き、キラキラと光り輝く夢を零した。

14番目の月に置かれた、シ・エンの宮殿は、リルーラの屋敷に
姿を変えた。

緑と青と銀の川が、輝く髪から流れる星に成った。

『この女性に相応しい神に成りたい。』

シ・エンが願うと、幼い神は強く濃密な月光に包まれ、次の瞬間
には美しい青年の姿をした立派な神が立っていた。

シ・エンはその瞬間に主月神と成った。

そして、4代目主月神は永遠の主月神でもあると、総ての神々が知った。

シ・エンはリア・リルーラに手を差し延べ、リア・リルーラはその手を取った。

以来。

女神の傍らには、常に主月神の姿が寄り添う事となる。

真に永久とわの神は創世の三柱。

リア・リルーラと主月神。そして夜闇の神。

主月神に力持ち對抗出来るのは、リア・リルーラを除けば、セルストしか存在しない。

逆もまた然りである。

セルストは常に『粹』の外に存在する。夜闇を創世の神と知らぬ、若き神々がその不遜に憤慨する。

だが、リア・リルーラもシ・エンも、創世の仲間を攻撃する筈も無い。

故に、セルストに対抗する術など、神々の世には無く、まして人間の世では尚更だった。

それは、眩惑の神。悪しきにして善なる神。

美しい夜闇の神セルスト。

混沌より生まれ落ちた誘惑の蛇。

時には正のそれと、総ての負の感情。そして闇の魔物を操る神。
禍々しくも正しく、過ちを推奨するも清らかで、正気と狂気、憎
しみと愛、夢と現実、穏やかな眠りと安らぎの夜、狂おしく眠れぬ
疑惑の闇。

そんな禍福を行き来して、人々を惑わす幻惑の神々を生んだ混沌
であり、彼らを司る王たる神でもあった。

1話 猫被り姫（前書き）

この頁を開いて下さり有り難うございます。
最後迄お読み戴けたら嬉しいです。

女神と、魔王？と、剣と魔法

当たり前に出て来ます。

世界が違うので、違う言葉が有ります。

異世界も、神や魔法使いならば跳べてしまうので、
同じ言葉も有ります。

この話の誤字脱字は雰囲気ぶち壊しなので、かなり気をつけてますが……発見しては修正しております。残ってたら……申し訳ございません。

造語をちりばめているので、え？と思われましょうが、作品内に
て殆ど説明が入る筈です。

見逃しが有りましたら、完結後のご指摘を戴けますと有り難く存
じます。

少しでもお楽しみ戴けましたら幸いです。

正直、カレラの年齢には触れないで下さい……的な……、登場人物
率が高いです。

そもそも人間では……等と云い始めたら、話が進みません。
カレラも恋をします。

しかも、すっかり熱烈なのをしたら国を巻き添えです。
一途に熱烈な恋をする魔王を、どうか見守って下さい。

1話 猫被り姫

何から話そうか？やはり最初は私の国の話をしようか？

絹の国と云う。東の歴史有る国だ。

セリカの名に相応しく、優しく穏やかな空気はまさしく絹の肌触りのようで、季節は常春。過ごしやすく美しい自然。美と香りを楽しませる花を咲かせる木々。その自然の美しさ同様に、雅やかな文化は派手さには欠けるが、歴史に裏打ちされた確かな自負を、貴族だけでなく民が誇るに足るモノだ。

寧ろ華美な南の文化等は軽侮の対象に近い。端的に云うならば、物柔らかに見えて自尊心が高い国民性、とも云える。

歴史と美を誇る国。

セリカの謂れは古く、もはや確かな伝承も失われて久しいが、春の女神アランナが名付けたとも、月の女神リア・リルーラの記憶の泉から生まれた国だとも伝えられている。

だからだろうか？

セリカの王族からは、リアに仕える御司が産まれる事が多い。側近とも呼べる神司など、他国に生まれる例は千年に一人有れば良い方なのに、セリカでは同じ千年で二名三名を数えた記録さえ遺っていた。

しかも。リアたるリア。リアの中のリア。リア・リルーラに。

それがどれ程の光栄か、どれ程の名誉か、そしてどれ程に、人として、普通に居られない事か……勿論、女神には解らないだろうし、解るつもりも無いとも思う。

女神だから仕方ない。

人に関われば狂うからとか、関係せずに居ようとか、そんな思いやりを見せてくれたり…なんて事は、期待してはならないのだ。

女神の荣誉に浴する王家。

私は、その美しいセリカに相応しい、美と知性を誇る姫として育った。

他国にまで聞こえるセリカの姫の素晴らしさは、私の努力の賜物たまものと云えよう。

そんな私にも嫁ぐ日が来た。これ以上比ぶべくも無い好条件。西の大国、クルトの第一王子だ。

富める国クルト。それだけでも魅力だが、私の美貌をもってすれば、他にも好条件の相手は選べる。

彼は第一王子であり皇太子でも有る。そして今現在、彼かの国に他の王子は居ない。クルトの国は王家の力が絶対的で、財も有り余る程だ。そして親族が少ない事は、対抗出来る程の敵が少なく、財の目減りも少ないと云う事でも有る。

我が国も王家の発言力は強く、民もそれなりに豊かだが、王家の財力は些程ない。

貧乏と迄は云わないが、有事の際に困らないとはお世辞にも云えない。

大国クルトの結納金は魅力に満ちて、私の心を彼の^か国に惹きつけた。

美しい王子の名をヒラリスと云う。妙な名だが、それさえも美しく感じさせる王子の絵姿では有った。例え半分でも、この絵の通りに美しいならば、それなりの愛を育めるだろう。

私はそう思い、この結婚を選択したのだ。

勿論。

私に対する愛は問題ない。他の姫君方とは違い、私の美しさは絵姿に画けるものではないからだ。美で総ては決まらないが、第一印象は大切だろう。

時に、絵姿と違うと問題になり、国に帰される姫が居る。誰とは云わないが、南国のさる小国の姫がそうだった。嫁ぎ先の我恵那王子とは夜会で一緒にした事が有るが、その時の彼は大層悔しがっていたと聞く。

彼は、私と彼女の絵姿を比べ見て、彼女に求婚したのだ。

絵より美しい私を知り、絵に遠すぎた彼女を思い出し、彼は上品とは程遠い罵りを口にしたと云う。

けれど、その時には既にヒラリス王子との縁談が進み、彼の力でもどう仕様もなかったのだ。容色のみで女を判断する阿呆に、相応

しい結末では無からうか？

騙される莫迦に居て貰わないと、私の努力の成果が半減するが、ああ迄愚かしい者を見るのもまた不快だ。

勿論、王族に生まれて、容色に興味を持たないのも困りものでは有るし、仕方ないのかも知れないが。

王族にとって、美しさは義務みたいなものだから、当然の様に縁談の相手には美貌が要求される。

美しさは国の象徴に相応しい。窓口にも相応しい。

崇めて貢がれる存在としても相応しい。

尊敬する言動も、美しいなら尚更有り難く感じてくれるモノなのだ。

王族は美しく在らねばならない。

容姿も、行動も。

美は力だ。神に列なるチカラ以外にも、やはりある種の力を持つ。人間のそれは、多少即物的ではあるけれど。

私の美しさもヒラリス様の美しさも、そう云う意味では非常に役に立つ代物だ。

セリカにとつても、クルトにとつても、喜ばしいこの婚礼は、十日前に挙げられる筈だった。

筈、と云う言葉からも解る様に、未だ式は挙げられていない。何故かと云えば、花嫁たる私が盗まれたからである。

十五日前の私は「明日はヒラリス様にお逢い出来る」と心弾ませて居たところを、悪い魔法使いに掠われたのだ。

「冗談みたいな話だが。」

笑い事ではなく、私にとっては、最大の悲劇である。

と、思ったら「悪い魔法使い」はヒラリス様の絵姿よりも余程美しい男で、私は少し気を良くした。

「貴女を誰にも渡したくなかったのです。」

愛を打ち明ける彼の言葉も、心地良かった。だがしかし、どんな甘い声も美貌も、所詮ヒラリス様の齎^{もたら}す財力には及ばない。

私が、セリカの姫として、誇り高く貞節に努めたのは云う迄もない事だろう。

2話 王子の出発

此処は西の大国クルト。

国王夫妻が表情を固くして、心配を隠せない様子だ。

「まだか!？」

青い顔で、王が声を荒げる等、滅多に有る事では無い。だが今の王は、傍らの王妃が今にも倒れそうな様子にも頓着出来ないで居る。何故なら、待ち詫びた王子の花嫁が、国境を前にして掠われてしまったからだ。

彼等はセリカの姫の行方に関する報告をずっと待っていたのだ。

魔女や兵士を始めとして、ありとあらゆる人々が、ありとあらゆる方法で、姫を探索していた。

そして、その指揮をとるのは、嫁盗人の被害者たるヒラリス王子であった。

「父上、余り周りの者に当たらないで下さい。」

恐れ気もなく声を発したのは、クルトの唯一の王子にして神々に愛されたヒラリス王子だ。

「ヒラリスか…どうだ?何か解ったか!？」

気難しい王の表情を和ませたのは、何も王子が唯一人の息子だからだけではない。

ヒラリス王子ならば何とかすると信じればこそである。

クルトの民は知る。王子はあらゆる神の寵愛を得ていると。

美と芸術の神、知の神、武の神にも愛され、剣の技は天才の名を欲しいままにしている。

どこの国より富み、どこの国より強く、民も豊かで倖福に暮らして居るが、人はそれだけでは満足出来ない。

クルトが何より望むモノ。

それは歴史、文化、芸術、はつきりと言葉や形に表すのが難しい、美の中に有る。

文化的でないとは云わない。クルトの民自身思ったりはしない。けれど、芸術を誇る国を、歴史の深い国を、どこか羨まずにはいられない、それがクルトの国民性なのだ。

文化も芸術も何処か借り物に等しいこの現状こそが、クルトの悩みだと云っても良い。

美と芸術の国セリカの姫を娶る事で、その不満もかなり解消される筈だった。

いや、解消されなければならないのだ。

王はそう思って、王子に尋く。

「何処に居るのだ、姫君は？そして、掠った魔女はこの者だ？」

王子は応えた。

「東の森の……魔王のようです。」

「黒の王子か!？」

そんなバカな?と、王は激昂し、王妃は意識を手放した。

それだけ手強い敵であった。

普通なら敵にしてはならない相手でも有る。

黒衣を纏った魔法使い。東の森は魔物さえ近付かない禁断の地だった。

行つて戻つて来たらそれだけで——目的地に辿り着けず迷い出ただけでも——倖運だと云うくらいの。

禁断とは聖地の証でも有り、聖地を破る者が赦されないのは当然とも云える。

だが、例え禁忌を破るうとも、王族として為すべき行動が有る。

だから、王妃は王子がそこに行く姿を想像しただけで気が遠くなつたのだ。

「行くのか」

王妃が侍女達に運ばれて、広間から去つた後の…第一声がコレで有った。

王子は一言。

「はい」

「そうだな、そうでなくてはならん。だが……」

王の眸には絶望と哀しみと希望が有った。

複雑に絡み合う感情を抑えて、王は告げた。

「行くがよい。クルトの名誉の為に。そなたの誇りの為に。そして、

彼の姫、美の女神の娘たる硝紫黎蘭花姫の為に！？」

仕来たり通りに、口上を述べ、右手にて指し示す。
東の方角を。

ヒラリスも仕来たりに従って礼を取り、姫君救出の旅に出る。
シヨウシレイランカ姫、5つの名を正式に呼ばれる事は滅多に無いが、それでも2つ名で呼べるのは彼女を『持つ』者だけだ。

今迄は、彼女の両親。セリカの国王夫妻。
今となつてはヒラリス王子のみが許された呼び名。

「はい、必ずや。次にお目にかかる折には、紫蘭姫と共に！」

そして王子は出発したのだ。

魔の森へ。

東の森へ。

黒き王子の治める領地へと、彼は姫君を救出すべく。

冒険の旅に出た。

3話 黒の王子

月を見上げ、燕夜は眸を閉じた。

聖光が刺さり貫く痛みに喘ぐ。

夜闇の眸も艶やかな黒髪も、生まれ落ちた時より燕夜を飾るものだ。

人間で在った頃の燕夜は、光り輝く存在だった。
黒髪も黒眸も、決して月光を拒みはしなかった。

手の平を見る。
肌はまだ白い。

血に濡れた肌が、闇に染まる日を意識させる。

そここの陰で、小さな闇が蠢く。
燕夜を崇め、賛美し、命令を待つ。

『応えて遣らないのか？』

「消えろ」

『姫は首尾よく掠った様じゃないか。』

「消えろと云っている！」

燕夜が上げた手に剣が握られた。
空間より月光と共に顕れ、横薙ぎに払えば閃光が、燕夜の眸を夜

闇の神々を焼く。

小さな闇は単なる影に立ち返り、燕夜の眸にも輝きが戻る。

だが、その男だけは平然と嗤った。

『おお怖い。怖や怖やのう。』

流石に月光の剣からは距離を取り、斬られれば無事では無い事を物語るが、単に月に身を晒したくらいでは消滅もしない。

「セルスト神。お前は何がしたいんだ。」

クツクツと夜闇の神は嗤う。

『神と呼び乍らその態度か。出逢った頃は殊勝で在ったものなのになあ。』

「答えないなら消えろ。」

燕夜は剣を振り上げた。

狙い違わずセルストの眉間に刺さる。
が、燕夜は舌打ちをした。

剣はそのままセルストを突き抜け地に刺さり、陰の様にセルストの姿は消えた。

滅した訳では無い。

剣は単にセルストの幻影を貫いただけだった。

哄笑が響き渡る。

燕夜が崇める神は他に存在して、その光り輝く神も燕夜を愛し子と呼ぶ。

だから、燕夜は闇に堕ちた存在では無い筈だった。

だが、人々の間では燕夜は魔王とさえ喚ばれ、夜闇の王であるセルスト神も呼ぶ。

愛し子と。

「解っている。私は姫には相応しくない。」

凍りついた声が、闇を呼ぶ。陰に沈む闇が、また蠢き始めた。

燕夜は嗤った。

夜闇の眼差しが月を見上げ、痛みを耐える。

姫が生まれるまで、この痛みは無かった。

欲望さえ失っていた燕夜は、闇に誘われても染まる基盤が無かった故だ。

だが。

欲しては為らぬと戒め乍ら、姫を望む心が在る。

狂おしい程に愛すれば愛する程、闇は強く深くなる。

希望も苦痛も忘れ、ただ黙々と職務を熟す日々には、セルストは眠そうな顔で傍らをうろつくだけだった。

紫蘭花が生まれ落ち、燕夜がその光に心囚われた日。セルストは眸を煌めかせた。

華やかな美貌に似合わぬ寝呆けた表情が、その日を境に消え失せた。

代わりに淫らな迄の艶が甦り、闇の力が活力を取り戻した。

燕夜の何が気に入ったのか、抜け殻だった頃から顕れる神である。姫の存在で心を取り戻せば、煩い程に燕夜に付き纏う様になった。

——リア。

燕夜は祈る。

月の光に焼かれ、眸の痛みが消えれば、燕夜は聖浄な存在に戻る。

だが、本当にそうなのだろうか？

本当に清らかな者の前に、セルストが顕現するだろうか？

燕夜は嗤う。

「私は、やはり汚れている。」

このまま、月の光に洗われて、消えてしまえば良いのに。

そうすれば、愛する姫の心を煩わせる事も無くなるだろう。

——だが、生きる限り……私は姫を思い切る事も出来ない。

燕夜は思つて、いつまでも月の下に佇んでいた。

4話 姫君の本音

王子が冒険への出発を遂げた頃、黒の王子に掠われた姫はと云うと。

魔法使いの高き塔にてため息をついていた。

窓から月を眺め、彼女は月よりも美しい姿を哀しみに沈ませて…
いた訳でもない。

美食もドレスも宝石も、望むだけ出て来る。いや望まずとも、姫君を美しく飾り立て、黒の王子は倅せそうに彼女を見つめる日々である。

心細かいかと云うなら、それもない。

「燕夜？燕夜っ」

姫君の声はどんな楽士が出す事も敵わず、どんな音楽よりも美しい。呼ばれた男はふわりと姫の傍らに降り立った。

魔法に慣れた姫は云う。

「退屈だわ。」

素っ気ない口調に声、冷めた眸に表情、掠われた身で、当然と云えば当然だが、姫君は何ら温もりを与える事をしない。

冷ややかに、誇り高く、己を掠って来た魔王を、けれど躊躇なく呼びつけるのだ。

魔王は喜々として従う。

姫から向けられるものならば、冷たい眼差しさえ黒の王子を魅惑する。

「では音楽でも」

「飽きたわ」

「ならば新しい宝石を」

「宝石で退屈が紛れるとでも？貴方はどこまで莫迦なのかしら？」

柔らかい口調で笑みを含んで紡がれる、姫君の容赦ない言葉も、黒の王子を惹き付ける材料にしかない。

「わたくしはね、何か面白い、目新しいモノが、欲しいの」

「例えばどんなモノですか？」

当然だが、その質問には冷ややかな眼差しが返される。

黒の王子の名にしおう、闇色の髪と闇色の眸が、白い肌に映える。神秘的で美しい王子。

東国の名を持ち乍ら、黒の色彩は北のもの。そして肌は西と東の融合した、滑らかな陶磁器の白。

年若い娘が、この美々しい若者を前にして、ましてや日々崇められ、こんなにも熱を持った眸で見詰められ、心が動かない訳もない。

紫蘭も結局は初心な姫君だった。例え、相手には決して覚らせなかったとはいえ。打算に依る結婚を、自ら進んで選び取ったとはいえ。そして、此処でも、心に打算がひしめいていたとはいえ、結局は初心な小娘の心を、捨て切る事は出来なかったのだ。

例えば、財産がクルトに匹敵しても、よしんば、勝る事が有って

も、西の大国を敵には出来ない。

ヒラリス王子が紫蘭花姫を諦めない限り、紫蘭の立場から黒の王子を選択する事は出来ない。

それでも、夜の眸に凝視られる事を、嬉しいと想う自分に気付いてはいた。

気付いたからと云って、何が出来る訳でも無い。唯こうして…退屈を口実に呼び出したり、悪態をついたりして、振り回してみたりがせいぜいだ。

燕夜はいつも、彼女の為に様々な趣向を用意してくれるので、城に居る時よりも楽しいくらいだった。

楽士を呼んだり。

芸人を呼んだり。

時には、夜の空を燕夜は姫君を抱いて飛んだりもする。

城に居た時よりも、行動には自由が有る。とは云え、城での生活の不自由さは彼女が選択したものだった。

良き姫。素晴らしき姫と呼ばれる為に、その名に傷がつく様な事は避けて通って来たのだ。

穏やかで優しく、思いやり深く、誰より美しい。賢く、誇り高く、近寄り難い程に高貴で、けれど高慢さは露程もなく、見つめるだけで倅せになれる様な、そんな姫。

そんな評判を守っていたのだ。抑圧も半端ない。

沢山の男を袖にはしたが、誰一人として、彼女を悪く云う者は居ない。

確かに彼女は賢明で、必要以上に偉そうな女は敵を作ると知っていた。

特に彼女が慎重に優しさを振り撒いたのが、女性陣相手なのが証拠のひとつだろう。

男の恨みを捻り潰すより、女を敵にした方が余程体力と根性が必要なのは当然と云うものだ。

それでも彼女は楽しかった。敵を避け、味方を作り、人を操り、政治のゲームに興じる事が、多分何より彼女を楽しませていたのだ。

夜会の席で、さりげなく動かす政治の駒に彼女はゾクゾクする程の快楽を覚えた。そして、彼女のその性質——勿論、性格では無い——の一端を知る王と王妃は、彼女をとて頼もしく思っていたのだ。その国王夫妻にさえ、彼女は本音で接して居たとは云えない。

だから彼女が、自らの本音を曝し、その性格を顕らかにしたのはこの塔に来て初めての事でも有った。

長い間被って来た仮面を外す事は、例え望んで演じて来たとは云え、一種の爽快さを彼女に感じさせたが、それは当然の事だったかも知れない。

彼女の企み好きな性質は、一介の村娘に生まれたとしても、平凡な一生に倅せを感じ取る事は難しかっただろうが、それでも娘らしい恋心に無縁と云う訳でも無かったのだから。それは結婚相手の容色に、必要以上にこだわる事からも知れる。

退屈だと云えば彼は来る。いや、名を呼ぶだけで充分なのだろうが、彼女は理由が欲しかった。

云い訳、と呼ぶべきだろうか。

だが、そんな自衛の手段よりも、自分を喜ばせる為に懸命な彼を見るのが嬉しくてたまらない。

何とも業だなあと思いつつも、姫君は冷ややかに彼を見遣る。

その美貌に、熱い眼差しに惹かれ乍らも、それを表現する事が許されない。

自分の立場を生まれて初めて腹立たしいと感じた。

「それを考えるのが、貴方の役目だと思ったけれど…役立たずにも程が有るのでは無くて？」

「申し訳ございません、姫君。例えばセリカの城で、どんな事が貴女の楽しみだったか、どうか愚かな私に、お教え願えませんか？」

悩ましくも夜の眸が煌めき、怯みそうになるのをグツと堪えた姫君である。

くつ、と喉を反らし、自然に、冷ややかに、腰を低くした黒の王子を見下して、仕方ないわねと言葉を綴る。

「そうね、夜会が好きだったわ。城ではそれが1番楽しみだったかしら。」

正確には巧妙に政治的手腕を発揮するのが、彼女に快い緊張感と満足感を与えていた。

それは普段の生活でも同様だったが、決して覺られずに立ち回る事が、逆に彼女の心を解放するのだ。

「陰謀と打算。欲に満ちた罠。」

ゆったりと笑みを浮かべ乍ら、それらが今迄通り愉しませてくれるかは疑問だが、と彼女は思った。

勿論、それらの政治ゲームに対する気持ちを霞ませたのは、この美しい黒の王子に出逢った所為に外ならない。

「貴方は楽しくなかったの？」

「そう…ですね。楽しくなかったと云えば、嘘になる。けれど、そんなものに構けていたから、私は…大切な家族を失った。」

そう云って燕夜は淋しい笑みを浮かべた。

静かに穏やかに微笑み乍ら、彼の眸には空虚な色が有った。

殊更に哀しみや苦悩を見せる事もせず、だからこそ見る者を切なくさせる色彩だった。

「梨那季亜さま、と云ったかしら？ 弟君は。3代前の主の、妾腹の王子でしたわね。お祖父さまは、貴方の大切な家族には含まれなかったの？」

「景影か。いや。愛しい弟だったのは確かだ。けれど、季亜は誰より大切だった。あれが死んでから、私は自分の罪に気付いたのですよ。」

祖父の兄である美しい王子の哀しみに、紫蘭姫は首を傾げた。自嘲さえ出来ない程の罪が、燕夜に有ると思えなかったのだ。

「どんな罪ですの？」

「誰も、……妻も、両親も、弟達も。誰の事も、本当には愛さなかった罪です。」

「……でも、貴方は梨那季亜さまを愛されたのではなくて？ それこそ、王位を継ぐ立場を捨てて、此処にお籠りになった。」

誰よりも、そう、歴代の王の誰よりも素晴らしい王になると謳われた男。なのに弟の為に、その美貌と才を隠したのでは無かったか。

「あれの事さえも、本当には愛さなかった。それに気付いて、初めて愛しかけて、余りの遅さに……私は自らを棄てたのですよ。」
「燕夜……」

時を留めた王子の嘆きは、素直に哀しむ事も出来ない程、深く捻れている。

梨燕紫夜蘭。リエンシャランと云う名の、セリカの伝説の人物は、こんな所で、別の伝説になって居た。

黒の王子。魔王と呼ばれる男として。

「何だかわからないけれど、どうでも良いわ。」

彼女は色々と云いたい事をグツと堪え、努めて詰まらなそうに、あっさりと、云った。

過去より、現在や未来が良い。この人の哀しみより笑顔が良いと紫蘭は思った。同じ名を持つ男に——この男の名を貰ったのだから当然の事だが——、初めて愛を教えたのが自分だと云うなら、彼に笑顔を与える事が出来るのも、また己だけだと今の彼女は知っていた。

この数日で知ったのだった。

「そうですね。夜会とはいきませんが、祭が有るようですよ?」

「そう? 空から眺めて見たいわ。散策に出ましよう。」

「御意のままに、美しい姫君。」

白い手に口付けて、夜の眸が熱を帯びる。

愛さなかった弟に、愛してくれた弟に、孫として彼女が産まれて

来たと知った時、彼は何を思っただろう？

何気なく水鏡に映し出した祖国の地で、少女は美しく賢く育った。そして、その行動が自分に似ていると知った時には、既に誰よりも深く愛していた。

誰にも渡したくないと思った彼は、己と同じセリカの王族としての価値観を持つ少女が、何処の国を選ぶかを知っていた。きつと、と、思い。

クルトの国に至る道に、罨を、仕掛けたのだ。

自分に似ていて、けれど自分に無い、大切な何かを持っている姫。彼女を掠って来た時に、彼は彼女の為なら死んでも良いと、そんな事を思っただ。死とは無縁の彼が、である。

初めての恋は、けれど多難を極めていた。

それでも、死んでも良い等と考える程に、死にたくなかったのなら、いつか倖せを求めたりも、するように、なるかも知れない。

少なくとも、この後ろ向きな思考に非常に立腹している前向きな姫君が、今は傍に居るのだから。

5話 王子の錯覚

紫蘭姫の絵姿を目にした時、ヒラリスは「何と美しい」と思いはしたが、多大な期待は抱かなかった。

南のカテアの国の姫と東国セリカの紫蘭姫、その二人が、国を越えて有名な美姫として謳われている。

二人の絵姿は同等に美しく、同じくらい目を惹いた。

だが、絵はより美しく描かれるモノだったし、パセクの姫の倣いもある。

あの日迄、セリカ、パセク、カテアの三国の姫達は王子達の憧れの的だった。

同じくらい美しい姫君達の、それぞれ違う種類の魅力に、王子達は誰が彼女達を娶る事になるのか、その心を手中にするのかと、浮き立つような噂話に興じたりもしたのだ。

実際に目にしないと、信じられない。と云う、当たり前前の事を学んだ事件である。

カテアの姫は美しかった。絵姿に勝りはしないが、詐欺と云う程でもない。カテアなら良いがパセクだと困る。絵姿の半分も美しくないパセクの姫。

美しくない…忌憚なく云うならば、寧ろ醜女と呼ぶべき女。

容色に、そこ迄こだわる気持ちは、ヒラリスには無かったのだ…

…あの日迄は。

「我恵那王子の二の舞は、踏みたくないからなあ。」

パセクの姫の婚約者だった、東国の王子を思い出し、ヒラリスは何と、紫蘭姫の美貌が如何程かと、調査の旅に出たのである。

セリカとカテアならセリカの方が国の文化度は名高いが、カテア一国として見るなら、それも十分に芸術の国だった。それならば姫を見比べたいのが人情と云うものだろう。

カテアの姫には彼の国の夜会で出逢った事があるので、問題はセリカの姫だった。同じ東の国の癖に、ヒラリスの友人である我恵那王子は彼女に逢った事がないと聞くが、自分は是非とも逢いたい。いや、見たいのだ。と、決心を胸に刻んで旅に出た彼である。

「そして垣間見たんだ、あの方を……」

ヒラリスは東の森へ至る道中に、想いを巡らし熱っぽく思い出していた。

忍び込んだ城の庭園は、見つければ危いが、美しいものだった。流石に名高いセリカだと、芸術の国をそれだけで納得させる庭を歩きつつ考えていた。

ますます、姫君には美しくあつて欲しい。いや、この際贅沢は云わない。人並みな美人で充分だ。カテアの姫ほどの美貌など無くとも構わないから、好みの範疇に収まってくれと願ったのだ。

相手の美しさは我が子の美しさに繋がり、我が子の美はそのまま政治の道具にもなるのだから、彼の考えは唯、自分の為と云う訳ではない。

勿論美しい女性は好きだが、それだけで無い事も確かなのだ。

「まあ、ダメよ。帰ってらっしゃい。エクウ…エクエちゃん……」

白い猫を呼ぶ少女の声は、細く、銀の月のように美しかった。
冬の夜の様に透明で、春のように柔らかかった。

ヒラリスはその声に凍りつき、次の瞬間、その姿に更に凍った。

その声にはその姿しか有り得ぬと云うくらいに、綺麗な、見た事もないくらいに綺麗な少女だったからである。

一瞬にして魅せられたと云っても良いだろう。

東国特有の銀の髪は青のグラデーションが懸かっていた。青と碧と銀の髪。1番強い色はやはり碧だったろう。眸はこれまた東国以外には探す事も困難な金銀妖瞳。その中でも珍しい、紅玉と紫玉の組み合わせだった。

彼はその時にセリカの姫を紫蘭と呼ぶ事に決めたのだ。

美しい姫。絵姿の倍、いや絵など彼女の素晴らしさの十分の一も描けてはいない。その絵の半分でも美しい女性であって欲しい、と願った結果がそれなのだから、彼が恋に落ちたのは当然と云えるだろう。

熱狂した、と云っても良い。

ただし、それは後ろめたさを隠す為、と云う要因を多分に含んだ恋の病だった。

東の名は理解は難しいが神秘的で美しい。紫蘭がまさしく紫蘭の花を顕し、夜明けと硝子を意味する名前だと教わった。

勿論、夫となれば、彼女を二つの名で呼ぶ事が許されるのは自分だけなのだ。硝子の花で硝花も良い、蘭の花も同様に美しい。姫の両親が呼ぶその名も綺麗だと思う。この、二つの名を呼ぶ事を許さ

れる、等と云う雅やかな風習がまた素晴らしい。

クルトの王子の「持ち物」にセリカの姫君がおさまるのだ…と、あからさまな言葉にするならば、そういう所有欲、支配欲を、満足させる事実なのだ。

この美しい名前に相応しい見目が有るかなと、意地の悪い事を考えたのも確かだった。

無意識の支配欲は、けれど姫君を目にした事で微妙に形を変えた。元々が素直な性質を持つヒラリスだから、そのまま恋うる心に置き換えて、歪む間もなく情熱の中に落として燃やした。

「そして僕はあの方を守る事を誓った」

走り出て、ひざまずいて剣に誓いたかった。彼女の手に剣を預け、その前に命を曝したかった。

誓いを述べて、許すと、彼女の云って欲しかった。共に誓いの儀式をしたかったが、勿論走り出たりはしなかった。流石にその程度の分別は残っていたので、心に一人誓っただけだ。だが儀式なしでも充分真剣な誓いだったのだ。

だからこそ、今回も旅に出て来たのである。

自分や国の名誉も大事だが、彼女への愛以上に重いものが有るだろうか？とヒラリスは思った。

立派に恋狂いの若者である。

まさか恋する姫君が、魔王に心を移しているなどと彼には想像も出来ず、心を痛める想像の翼が向かうのは、彼女が如何に心細い気持ちだろうか…どんなにか苦しんでいるだろうか、等と美化された繊細な姫君の姿ばかりである。

「姫君は僕を待っているだろう」

確かに待っていた。

「早く救われたいと、願っていらっしやる事だろう…」

救いも、求めてはいただろう。だがヒラリスの恋に眩んだ眸に映し出される姿とは、些か違ったかも知れない。

彼がそれを知らないのは、彼の倖せに一役買っていた。いや、それを知る事は、彼を一転して不倖にさえしただろう。

しかし、彼はそれを知らず。だから、こうして旅を続ける。

正式な旅ではないから、そして、唯のお忍びでも無い故に、街路は使えず慣れぬ悪路を進んだ。

姫君の為にと、追いはぎや強盗も斬り伏せ、そこに至る道を塞ぐ、悪人達の巢も潰さなければならなかった。

こうして時に各国の王子達が、冒険の旅に出るお陰で、悪人達の数を広めずにいられるのだ。

冒険の失敗も念頭に置いて、秘密裏に事が進められるのも、もしかして民にとっては都合が良い事だろう。

勝手に秘密に行く為に、平和な街路を避けて、悪路を進む。悪人達の潜伏する人の通わぬ道を切り開いてくれるのだから。

そして今日も彼は戦う。

自分を愛さぬ姫の為に。

誰より愛する、姫の為に。

6話 掠われた姫君の日常

「紫梨花、我が姫。今日は貴女の名を飾る花を手に入れて参りましたよ。」

「まあ、この紫蘭は…」

この星のものでは無いだろう。

「女神の生まれた星にある花が、元々の由来と云いますからね。」

この世界のものでさえ無かった。

紫蘭は複雑な気持ちで微笑み、小さくため息をついた。
それでも、この星の花とは違い、小振りな紫の花に和む。端正された大輪も良いが、この花は野趣を含み素朴で可愛いらしい。濃い紫の大量の花束に、どれだけ摘んだのかと笑いも零れる。

自分の為に揃えられた花が嬉しくない訳がない。大多数の女がそうで有る様に、紫蘭もまた花を贈られる事が好きだった。

「貴女と美しさを競う事は叶わなくとも、貴女を飾る事ならば、この花にも出来るでしょう。」

そう云って、彼女に花を捧げて跪く。

傳^{かしず}れ、手に口付けを許し乍ら、彼女は泣きたくなる。

彼はこれ以上、彼女に近寄る事をしない。愛していると云い、激しく深い恋を眸に顕して、ただ視つめるだけ。

言葉と、言葉以上の眼差しと、たまに……そつと白い手に口付けるだけ。

勿論。

それ以上の事を望まれても困る。最初に拒んだのは紫蘭だし、また今求められても拒むだろうが、だからと云つて、嫌だと思つていく訳でもない。

女心は複雑で、彼女の立場が尚一層それを深めた。

「クルトの王子が、三弥山まで来ましたよ。あそこの盗賊に襲われて負傷したようです。」

優しい声がうつとりと、彼女を視つめたまま告げる。

穏やかに。

静かに。

全然違う話題なら似合うかも知れない。

もっと平和な、優しい声が似合う話題は、いくらでも有る筈だけれど、優しい風情に混乱を覚えるその話が、燕夜の一番外に語る話題で、紫蘭は気分が悪くなった。

燕夜を残酷だと思ふ訳でも無く。ただ、己の罪を自覚する。

「大丈夫ですよ。ちゃんと逃げ延びて、手当てもしたようです。」

穏やかに残念だと続け、そんな事を云いつつも紫蘭の顔色を心配そつに窺う。

的外れな心配をして、彼女を喜ばせるつもりの情報告げた。

「十日もすれば来るでしょうね。彼は、貴女に熱烈な恋をしているようだ。」

女を切なくさせるような微笑は、紫蘭のお気に入りの表情のひとつだったが、彼女は微かに頬の辺りを緊張させて、首を振った。

「一人にして。」

「……御心のままに。」

彼の不在の空間で、彼女はまた首を振った。

ゆつくりと、左右に振って、泣きそうな表情をした。

呼ばない限り、彼はこの部屋を観ない。声を掛けてから現れるのもその為だ。

偏執じみた執着を見せ乍ら、珍しいくらいに礼儀正しい紳士で、どうしたら彼を嫌えるのか教えて欲しいと紫蘭は思う。

感情を隠せないなんて、彼女にはついぞ覚えが無かった。

今迄、自ら計算して零す以外に、心を曝した事など無い。

なのに、誰も見てはいないからとは云え、今…涙を堪え、せき止める事の出来ない感情に振り回されている。

紫蘭は叫び出したいような気持ちを持て余した。

もし、燕夜が彼女の様子を目にしたら、また、哀しく嗤うのだろうか。

ヒラリスの為だと誤解して、自らを嘲笑うのかも知れない。

事實は燕夜の想像を超える。

ヒラリスが来ると知った時、無論、来るのは知っていたし、早い到着を祈ってもいた。燕夜からも折りにふれ、ヒラリスの道程を報告されていた。

だから、別段、驚くには値しないのだ。
本来なら。

なのに先刻、そんなにも近く迄来ているのか…と衝撃を受け、更に、そんな事でショックを受ける自分自身に愕然としたのだ。

早く…来て欲しいと願っていた。

早く、来てくれないと…自分の心が解らなくなるから、いや、そんなものは本当は解っていたが、せめて、理性が保てる内に来て欲しい…と、彼女は願ったのだ。

救って欲しいと願った。

国も、何もかも。

総てを、どうでも良い…と、すっかり考えてしまうような、そんな自分の感情から、助け上げて欲しい。そう彼女は願った。

想いを殺して、何も無かった振りで、嫁げらと思った。

時に胸が痛んでも、狡かった自分を懐かしむ未来が待つと信じた。

恋など錯覚に過ぎず、ならば夫となる人に、上手に恋をして、愛されるように立ち回れば、それが一番倖せな筈では無いか？

燕夜なんか。何故愛したりしなければならぬのだろうか？

ヒラリスの行程に、来るな、と念じた。

早く来て、助けてと願った。

誰も来るなと祈った。

祈る自分を紫蘭は自覚して、けれど己の立場もまた…よく弁えていた。

政治のゲームはもはやどうでも良い——何より彼女を楽しませたのに——が、国の平和と安全をどうでも良いとは云えない。

そして、彼女の貞節が破られる事は、セリカとクルトが争う事で

もあつた。

例えば、南の国の姫ならば、体をひらかれる事が、貞節の終わりだ。男達の考えもそうで、紫蘭には理解出来ない。

ならば心で誰かを愛しても、体さえ触れなければ貞節は守られるのか？

理屈に合わない、紫蘭は思う。だから、東と似た考え方を持つ、西に嫁ぐ事にしたのである。

実際、掠われた時には、嫁ぎ先が西で良かったと思つた。

けれど今。紫蘭は肌を守り乍ら、心を奪われた。

決して、誰にも覚らせはしないが、確かに紫蘭の貞節は失われたのだ。

南が嫁ぎ先ならと、一瞬とは云え、紫蘭は考えた。

あの国が、例え、一回でも掠われた姫に、敬意をはらわないと知り乍ら、それでも、そんな莫迦な考えを浮かべずにいられなかった。それ程、彼女は衝撃を受けたのだ。

何よりも、燕夜がヒラリスに自分を渡すかも知れないと、そんな可能性を恐怖した。

そして、それを恐怖する自分自身こそ、彼女は何より怯えたのだ。

紫蘭はけれど、いつまでも怯えるだけでは無い。

毅然と顔を上げた。

あごを引いて、眸を細めた。

決意には一瞬で足りた。

「燕夜。」

どんな囁きにも燕夜は応じる。

黒衣の男は相変わらず美しかった。

誰よりも美しいと彼女は思った。

美は力。美は正しき事象。身についた教えが後押しをする。

「貴方は、わたくしをヒラリス様に渡すの？」

冷やかに彼女は尋いた。

甘い声が応えたのは、彼女が望んだソレに相違なかった。

「彼は殺します。」

「クルトが攻めてくるわ。」

冷たい声がつまらなそうに云うと、彼は深い静かな笑みを見せた。相変わらぬの淋しい笑みで、何処までも沈みそうな深い色の眸。

それでも、紫蘭を知らぬ頃の、愛する事を知らぬ彼の、空虚な絶望と寂寥感は失くなっているのだ。

彼女は以前の彼を知らないが、その事は知っていた。

「全軍は来ませんよ。例え来ても追い返しますが。」

「全軍相手どれると？」

不信の眸に苦笑が返る。

「私はこれでも魔王ですよ？」

その言葉に、彼女はいたく安堵したのだった。

「私は、けれど…貴方のモノにはならないわ。」

「ええ、それでも。私は貴女と共に居たいのです。」

「愛さないわ。」

「ええ。知っていますよ。」

その笑みは、この上なく優しいものだったが、彼女を泣きたくさせた。

先程以上に、彼女を哀しませ、苦しめた。

そして、それ以上に怒らせた。

嘘付き。知らないわ。貴方は何も知らない。

私が誰を愛するかさえ、あなたは知らない。

そう思っただけで彼女は顔を背けた。

冷淡な振りは必要無かった。

充分に、男に対して反発を覚えていたからだ。

「何処かに行つて。しばらく帰つてこないで。」

「はい。姫君。」

何にも知らない。

私の望みも、本当の言葉も、何ひとつ。

どうして知らない？ 彼女は床に、机上の物をたたき付けた。

涙は出ない。

泣きたかったが、泣けはしない。

余りの情けなさに、呆れ果てていたのだ。

あの莫迦が…と紫蘭は思う。

初めて逢った時には、全部解った癖に、と。

内心、叫んで、今度は椅子に手をかける。

叩き壊した。

護身用に好きでもない——と周囲が考えていただけの——剣や体術を習っていたが、熱意はとも役立っていた。彼女は刺繍などより余程、剣や武術の方が好きだったし得意だった。

ヒラリス王子は、彼女のこの姿を見ても、恋の海に溺れたままだろうか？

少なくとも、燕夜ならば、ひとかけらも想いが冷める事はないだろう。

燃える事はあつたとしても……である。

何と云つても、彼そっくりの手腕に加えて、彼に無かつた「大切な何か」を彼女は持っているのだから。

7話 秘め事

別の世界から燕夜が持ち込んだ紫蘭の花は、中庭に自生したかの様な一画が造られていた。

勿論、姫の心に適った事がその造園の理由だろう。紫蘭姫はその場所に気付いた時、胸の奥が締め付けられる様な気がした。

小さな花は本来フライサに自生する大輪とは比べられないものの、エルジュアスの月光を浴びた所為か一回り大きな花を咲かせていた。もしかして世代を重ねれば、この世界の紫蘭になるかも知れない。

紫蘭姫は自分と同じ名を持つ花を、そっと摘み採った。

緑が多くなり過ぎるから、葉は気まぐれに落としつつ、腕の中に花束を作っていると。

不意に感じた違和感がある。姫は訝しく眸を細めた。

木々の連なりの間に、それは存在した。

紫蘭姫はゆっくりと背筋を伸ばし、周囲を見回した。

違和感に気付く。

昼の月光が燦燦と降り注ぐ中、そこだけ影が濃密に過ぎる。

木漏れ日が注ぐ筈の隙間さえ、深い墨が塗り潰し、奇しい気配が立ち込めた。

一步、後退り。

だが、視線が外せ無くなった。

何か……が小さく嗤う気配を感じた。

凝つと眸を凝らせば、濃密な闇が更に艶を帯びた。

絹の川がサラサラと足元まで流れて来て、姫は息を詰めた。

先程まで「見え」なかったのが不思議なくらい、不意にくつきりと像を結んだ。

「……。」

漆黒の髪はサラサラと流れ、夜闇の眸が面白そうに紫蘭を「視て」いた。

肌が泡立つ。

闇の川が蒼褪めた様な肌を飾り、それがゾツとする程に艶かしい。

姫はまた一步、足を後退させようとしたが、動けない自分に気付いた。

「……………」

——挨拶を……すべき、か……否か。

紫蘭姫は月神系の神々しか、今まで顕現を見た事は無い。
無視するには恐ろしく、関わるのもまた遠慮したい。

『どちらでも構わぬよ。』

ゾクリ。

背筋に寒気が走る。

甘くドロリとした官能を刺激する声に。

紫蘭は知らず、奥歯を噛み締めた。

『ソナタの前に、闇が姿を顕さない訳でも無い。ソナタが気付かないだけだ。』

——では、今迄にも……傍に闇は在ったのだろうか？

『闇は何処にでも在る。ソナタの光が強すぎて、視る事が適わぬだけだ。』

心を読まれる不快は、しかし神々を相手に抱いても仕方がない。寧ろ、言葉を発する必要を回避出来た事を、喜ぶべきだと割り切った。

紫蘭花が内心断じれば、夜闇は嗤う。

『潔い事よな。ソナタのソレが、闇を寄せ付けナイのだ。小さな闇など、ひとたまりもナク消されてしまう。』

——小さな……闇。

しかし、ではこの眸の前に坐す神は、どう解釈すれば良いと云うのか。

紫蘭が自らの心に影を帯びたが故か……と、最近の自分を省みれば、闇は軽く否定して見せた。

『ソナタの悩みなど、闇を喚ぶ程もナイ。男を愛し欲するが、立場

は応じる事を許さない。どうせなら力づくで来ればと願いつつ、そんな男はまた好まない。』

紫蘭花はあからさまな台詞を苦々しく思った。

夜の神は遠慮を知らない。

『ならば、イマが続けばヨイと断じる。ソナタは既にコタエを出している。』

そう告げて嗤う神に、紫蘭は内心訝しく思った。

確かにそれは偽る事無い心ではあるが、もっと自分は苛々と思い悩んでいる様な気がした。

闇は紫蘭の疑問に応えた。

『ソナタは、アレの心がスベテを晒さぬ事を、怒っているに過ぎない。無意識がソナタにソレを教え、何故アレが苦しむのかと、知らない己に怒るに過ぎない。』

——嫌な奴。

紫蘭姫にはどうしようもない燕夜の心である。

ただ、自分が何かを願えば、それを叶える為に嬉々として応じる。その姿に、紫蘭は何かと用を云い付けたりもした。

最初は、彼を呼び付ける云い訳に過ぎなかったのに、すぐにそれは彼を慰める為のものに代わっていた。

だが、燕夜の心は晴れない。

何かを常に隠し、何かから眸を背ける。

何かに常に怯え、紫蘭を欲する気持ちに嘘は無い様なのに、決し

て叶わない願いと断じた風情に腹が立つ。

『アレが何に怯えるか知りたいか？』

知りたい。

紫蘭の心は希求する。

『アレがソナタを得る事はナイと決め付ける、そのココロのウチを知りたいか？』

知りたい。

紫蘭花は強く願う。

しかし。

『ならば、手を。』

蒼白く艶く肌が、美しい手が紫蘭に差し延べられた。

その手を。

紫蘭花は視つめ。

笑った。

—— 莫迦げてますわ。

初めて、読ませる事を目的として、ハッキリと心に紡いだ言葉である。

『アレはソナタを愛しているぞ。ソナタはアレを救うチカラを持つ。

その術を、知りたくはナイか？』

知りたい。

強烈に願う心がある。

だが紫蘭は笑う。

——だから？それで私が闇の手をとれば、より苦しむのは燕夜ですわ。

ならば、ずっと苦しめば良い。

燕夜が何に苦しむかなど、知らないままで良い。

それが紫蘭を愛する故ならば、紫蘭はその苦しみさえ愛する事が出来る。

『なるほどそうか。そうか。そうか。』

嗤う夜闇に紫蘭は齒を食いしばる。

『ソウカ。』

愉悦が混じる哄笑に、紫蘭は眉を顰^{ひそめ}た。

『強い。強いなあ。アレがソナタを欲する理由がワカッタ。ワカッタ。ワカッタ。』

気持ち悪い。

かろうじて感じられた人がましさを失った神は、嫌悪さえ誘う。それでも何処か甘く響く声は、官能と墮落を紫蘭に語りかけ、姫を立腹させた。

けたたましいまでの哄笑が響く中、斬る様な声が響いた。

「何をしている！！」

軀は思っままに動かないが、燕夜が駆けて来るのを紫蘭は感知した。

駆ける燕夜に、今は『跳べない』のだと理解した。

背後に温もりを感じ、え？と思う間もなく、紫蘭の腕が取られ、後ろに引かれた。

思わぬ乱暴な仕種で腰を抱かれ、足が浮く。距離を取るのも、燕夜自身の足が運んだ。

魔法無しでも、それを素早く為し得、燕夜は紫蘭を背後に『闇』を見据えた。

紫蘭花が聞いた事も無い、冷えた声が硬く響いた。

「去れ。」

『何を怒る？私はただ、此处に居ただけだ。』

紫蘭は微かに眸を細めた。

燕夜も、言葉は返さない。

「去れ。」

『私と語る姿を、姫に知られたくナイのか。』

やはり…と紫蘭は思う。眉を寄せ、心を閉ざす。

燕夜は動じない。

紫蘭の前で、燕夜の手には月光の剣が顕れた。

その安堵を、どう云い現すべきか。

紫蘭花はそつと、眸を伏せた。

月を、燕夜は忘れた訳でも無いのだ。

『おお怖い。早くおいで。その姫ならば、我らも歓迎するほどに、連れておいで。二人纏めて、我らの眷属と為そう。』

誘惑の闇が甘くドロリと溶けた。足元に寄せる快樂の闇に、紫蘭は再度奥歯を噛み締めた。

燕夜が凍る声で告げた。

「去らぬなら斬る。」

だが、剣が振るわれる迄も無く、闇は姿を消した。

燦燦と昼の月光が辺りを照らす。

真昼の健全さに、闇の不在を認識した。

紫蘭の足が纏れ、燕夜が支えた。

「今の……は？」

「さあ。」

燕夜は優しい眼差しと声を取り戻して、紫蘭を労る様に抱き上げた。

次の瞬間には、姫の寝所に場所を移していた。

「少し、お休み下さい。」

「……………ええ。」

燕夜は優しく告げて姿を消し、姫は憂いを俯く事で隠した。

そして。

寝台に腰を下ろした姫の。

足元にまた、忍び寄る闇が在る。

「アレが何を隠すか知ったか？」

紫蘭は応えない。

「アレは私の愛し子だ。」

だが、月光の剣を燕夜は握った。

「ソナタもおいで。私の手をお取り。ソナタの強さは、我らの好むところでもアル。」

神々に嘘は云えない。

どんな罰が与えられるか、解ったものではない。

また、神々も、嘘は云えない。

そういつ、存在だからだ。

だが、その気まぐれは、真実をその時々に変える。
夜闇ならば尚更だろう。

だから、確認するならば過去でしか無く、信頼出来るのは断定の言葉でしか無い。

「夜闇の君。燕夜は、御身に仕えると申し上げましたか？」

闇は嗤った。

面白い事を聞いた、と云わんばかりに。

『ソナタもおいで。』

ソナタ「も」と云われれば、惑う者は多いだろう。

だが、政治の世界でさえ、それは使われる罠でしか無い。

事実、燕夜は騙された。

夜闇の偽りに馴染んだであろう燕夜も、紫蘭花が隠し、夜闇も謀るならば、気付かず見過ごす「嘘」と成る。

『嘘ではナイだろう？ただ告げナカッタだけだ。』

そう。

そして、燕夜が望む偽りに、誘い込んだだけ。

『姫に知られたくナイと、アレが希むのは事実には過ぎない。』

しかしあの場で告げれば、燕夜には紫蘭花が「闇」を「視た」事

実さえ覆い隠す「偽言」と成る。

為した行いに嘘が無くとも、嘘に成すのが夜闇の言葉だ。

紫蘭花は知り、だからこそ勝機も見出だした。

『私に挑むか？私の名を知らぬか？』

その誘いには乗らない。

夜闇は偲び嗤う。

燕夜の邪魔を、呼び込まない様に。

哄笑を堪え、咽で嗤った。

『面白いなあ。面白い。ソナタの気概は気に入ったよ。私の名を呼ぶ事を、ソナタに許そう。』

嬉しくは無かったが、紫蘭花は礼を云った。

「有り難き倅せに存じます。リー・セルスト。」

『そう。倅せ……と告げるに嘘がナイのだな……。』

少し、残念そうな声音は人がしくも有り、そうすると麗しい貌が却って端正な静けさを印象付けた。

すっかり名を口にして、罰の口実を差し出す事を思えば、その「許可」を有り難いと思う気持ち「嘘」に成る事は無い。

『なるほど？』

当たり前だが、夜闇の神は美しい。

紫蘭花は非常にソレを迷惑だと感じた。

『そなた……本当に面白いな。』

優しいとさえ呼べる微笑みから、紫蘭花は視線を逸らせた。
だから、神々と関わるのは面倒なのだ。

紫蘭花が惹かれた事に気付けば、その様に振る舞いもする。

『そなたが気に入った。それに嘘は無い。迷惑かな？』

迷惑極まりなかった。

しかし口にすれば、それは無礼を咎める恰好の理由となる。

「勿体ないお言葉です。」

歓喜する心も、確かに否定出来ず、だから言葉には真情が籠った。

セルスト神はセリカの媛を興味深く視た。

燕夜が想いを乞う相手としてだけで無く、媛の魅力を見出だした。

『アレは私に従う気はナイと云う。だが、月にも従属せず、闇に染まり力を蓄える。ソレは心と軀に負担を与える。』

紫蘭花は息を詰めて聞く。

下手な思考を巡らすならば、話が逸れる恐れを感じ、心を硬く閉ざし凍らせた。

『闇でも光でも、属するならば安定しよう。』

そう告げて、夜闇は姿を消した。

「何の……………気まぐれ？」

紫蘭は身震いした。

今更乍ら、恐怖感が甦る。

心臓が煩い程に踊り、息苦しさに目眩がした。

だが。

知りたい事を教えられたのは確かだ。

夜闇が、紫蘭の存在を「お気に入り」に数えた事は、まだ知る由も無い紫蘭花だった。

8話 王族の色彩

東の森に至る道程は、ヒラリスにとって、とても長く厳しいものだった。

三弥山で、またもやその辺り一帯の悪人達と戦い、剣を交え、彼は肩を斬られた。

自ら簡単な手当をし、逃れついた洞窟のなか、ヒラリスは体を休めた。

その顔色は酷く悪かったが、彼は諦めない。
瞼を上げたなら、その蒼の眸が情熱を失ってないと知らせるだろう。

美しい王子は、白い肌に焦燥を載せて、それでも絶望する事はなかった。

それは紫蘭への想いもあるだろうが、ヒラリス生来の前向きな明るさがモノを云う。

誇りや名誉も、王子にとって重要な問題だったが、彼女に想いを馳せれば、それらは脳裏から消えた。

自らに暗示をかける様にして、ヒラリスは紫蘭への想いを深める。

無意識に、セリカの魔法に畏怖を抱き。

心に掠めた不遜な感慨を、熱烈な恋で上書きしようとした。

ヒラリスは基本が大らかで明るい性質の男だった。

故に、そんなきっかけでも捻れる事はなく、本物以上の愛が育つ筈だった。

何せ、ヒラリス自身は殆ど無自覚だ。

庭園で、美しい姫を見た。

力を含む美しさに警戒した。

その美しさに陶然とした。

警戒心はヒラリスの内心奥深くに沈み、意識したのは綺麗な幻の記憶だけだ。

そもそも、東国の王家は心を操る魔法に強い。

セリカは特に神に愛され——能力に恵まれ——姫の美貌ならば、確実に。

全くチカラを持たない、等とは考え難かった。

神司、太宰、王家。

熱い息を吐いたのは、だが、姫への気持ちからではなく傷が熱を持ち始めた故だ。

神司はカンシ、何故かイシとも云われる。

神の歴史を学ぶ時に、真っ先に出て来るのは、やはりセリカだ。神に1番近い、神司を当たり前の様に産む国。

神の司だ、その『宝』への通詞を行う。

故に人へのそれと画して通司が、この場合は正しい。

小さき門、狭き門を司る存在。

教育係の声を、ヒラリスは思い出す。神官と、王宮の宰と、何人

もの声が、語る。

イシとは神殿の鍵の管理者と云う意味も有ります。

イは狭き門を表現します。

出納を司った為に混同されたのでしょうか。

神司^{カンシ}、カムシでも宜しいですが、と教師は云う。

神司のツウジする『宝』は、神の存在です。

お言葉。お声。

その煌びやかな、存在の証を、神の従僕たる人間に届けて下さる、それが神司です。

だがソレは巫覡の存在とも違う。

何故なら。

巫女や神官は。

神の声を聞く事があっても。

人間でしかナイからだ。

人間として生まれ、神に列なる。

ソレが。

神司で有り。

太宰で有り。

王家は、それに膝を付くものでしかない。

神司と太宰の違い。

それは、統治するか否か……だ。

教師の声が云う。

立場として、どちらが上と云う事は無い。
強いて云うなら、神の寵愛次第とも云うし、その『神次第』とも云う。

些か不遜だが、
と教師は声を低める。

神にも、上下関係が有る。

リア・リルーラを頂点と讃えるのは良い。
ソレは神々が謡う詞だ。^{コトバ}

シ・エンを頂点と讃えるのも良い。

リアを例外とすれば、主月神は神々を統べる存在だ。

主月神の下に月神達。勿論、17番目の月女神たるリア・リルーラを除いて、ソレは全くの『事実』である。

単にリアと称えればリア・リルーラの事だが。
単にリーと称しても、リー・シェンを示しはしない。
シ・エン。またはリー・シェンと唱えるのが慣例となっている。

リア・ダ・リアルテ。
女神の中の女神。

男神を呼称するならリーだが、リア以上に名を喚ばぬ様に氣遣わねばならぬ神も存在しない所為もある。

他の神々は月神達に仕える。

ギリギリで、大丈夫だ。

だが、リア・リルーラとシ・エン以外の月神の上下やその関係は口にすべきではない。

ましてや。

他の神々の問題となると、人の世界もかくやと乱れ。
決して、正しい解答など有りはしないのだ。

では先生。

と、ヒラリスは尋ねたものだ。

主月神やリアの寵を得る神司や太宰が居たら、
その人は神さえ憚る存在と云えますか？

教師達は息を呑んだ。

不遜窮まりない、それは言葉で。

言ノ葉に載せた、その事実に寧ろ憚り。

教師達は、教育系の権限をもって、ヒラリスに楔ぎを命じた。

熱の所為か唸され乍ら、ヒラリスはいつしか夢を見ていた。

過去の夢を。

教師の一人は、しかし後に云った。

あれは、不遜では有りますが、事実でも有るでしょう。

二度と口になさぬよう。

と、飽くまでも慇懃に、命じられもした。

西国は、神の加護が少ないのかとヒラリスは思っていた。
だからこそ。

その光栄以上に恐怖を知らず。

不遜な念いが生まれたかとも感じた。

王家に生まれて、口に出来ない想念だったが、教師達は、周囲は、
全く逆の事を王子に見ていた。

こんなにも。

神の寵愛を得る王子が、西国に生まれた事が有るだろうか？

その王子は、期待通り、東の姫を娶る。しかも、東の中でも名門
中の名門、王家の中の王家。

惑星フライサ、最古の王朝の直系の媛宮である。

クルトの民の熱狂は如何ばかりか。

その姫が掠われたら、そりゃあ助けない訳にはいかない。

神に愛された美しい媛宮、多分チカラ持つ姫君に、ヒラリスは嫌

われる訳にはいかない。

そして、惹かれるに充分な美しい姫君だ。

ヒラリスは無意識に、姫君に対する熱狂的な恋慕を己に課した。
枷として心を縛り、その打算は奥底に沈め鍵をかける。

媛宮が心を読むならば。

もっと、深く、甘く、優しい。

恋を、愛を、育て上げないと――

倅い。

ヒラリスは恋を知らなかった。

今までに一番衝撃を受けたのが。

外ならぬ紫蘭姫相手だったから。

擬態はきつと。

本物の恋になる。

筈。

だった。

世の中は。

そんなに上手く行かないと。

神の寵愛をうけたヒラリスは、知らなかった。

だが。

此処に。

神の寵愛は錯綜する。

ヒラリスの夢の中で、教師の声が云う。

気まぐれに東の魔王と称しても、あちらの太宰であるには違い有りません。

あのお方こそが、主月神に任じられた東国全ての王であられ。リアのご寵愛は、なんと人間の王子ヒトで在った頃から変わらぬものと云います。

決して、関わってはいけませんよ。

東是王——トウゼオウ——。

東の王は是なりと、神が宣告した存在。
東を統べる王。

東国全てが、従う王。

東の森、中叟あたるとの奥に住まいする、
隠遁を気取る王。

いつしか。
黒の王子。

東の森と魔王と喚ばれ、自らも称して憚らない。

千年王。
とも呼ぶ。
永き時を。
神の代わりに。
東を統治する。

トウゼ王。

梨燕紫夜蘭。
リエンシヤラン

美しい夜の魔王。

普通は。

そんなモノに。

勝てる訳がナイ。

「関わっちゃったよ……先生。」

熱の所為で、常の強気が鳴りを潜めた。

姫？

覗き込む眸の色はセリカの王族の金銀妖瞳。
銀と青の髪が月の光を呼び込む。

冷たい手が額の熱を掠う。

熱に浮かされ乍ら、見上げた貌は。

庭園で垣間見た姫よりも、硬く冷ややだ。

月よりも、なお冷たい美貌。

なんて。

綺麗なんだろう。

ヒラリスは手を伸ばす。

届かない月かと思ったら、冷たい髪に指先が触れた。
肌に触れれば、温かみがつる。

綺麗な貌が微かに驚きを示し、眉を寄せた。

我慢出来ずに引き寄せる。

触れた唇は。

すぐに逃げると思ったが。

不意に。

強く求められた。

唇を吸いあげ。

舌を絡め。

唾液を交換し。

ヒラリスは、自分が一体何の夢を見ているかも解らなくなる。

息が苦しくて逃れた。 追いかけて来て、舌を吸われ相手の口中
に引き込まれ、歯をたてられた。

欲望を刺激され、ヒラリスも積極的に応える。 角度を変え深く口
付ける。 上唇を軽くはむ様にして、舐めて、吸って。

口腔内の快樂が、下半身にも熱を与える。

「はっ……？」

ヒラリスを押さえ付けるようにしていた影が。
唐突に離れた。

直前迄、強く求められていたのに。

熱を分け合い。

喉を吸われ。

白い手に肌をまさぐられ……。

姫……は、そんな事は、しない。

ぼんやりと、思っで。

けれど、やっぱり離れた熱が恋しいような
そんな気がして。

混乱したまま、意識を手放した。

別の熱が、取って代わり気付かなかった。

ヒラリスの。

傷からもたらされた熱は下がっていた。

深く裂かれた、怪我そのものも。

月の光の下で。

痕を消していた。

前日は、痛みに呻いた。

今現在、傷は何処にも無い。

前日は、熱に喘いだ。
今、スツキリと爽やかだ。

あれは、三日で治る感じでは無かったなあ。
とヒラリスは独語する。

これは最早死ぬのかと、半ば覚悟した頃に……。
救けは来た。

神の、寵愛を湛えた姿で。

西にはチカラを持つ者が少ない。
だから、多少、戸惑いはするが。

このチカラが、神の加護なのは解る。
美しい、青年が、傍に居て。

そりゃあチカラの一つや二つもつだらう美貌で。

明らかに。

セリカの血筋だった。

眠る前に気付いていた筈だが。
眠りに落ちる前より。

意識してしまうのは何故だろう。

傷の所為で高熱を出した。

そこに。

顕れたのが彼である。

その美貌は単なる民とも思えず。
それ以前に。

『白』の住人と知り。

女神の、お膝元。
疑うのも、不遜。

熱に浮かされても、ヒラリスは冷静に受け入れた。

その美しい同行者を。

身分的に、受け入れざるを得なかった。

とも云う。

熱の所為か、記憶は、所々曖昧だ。

それでも、とヒラリスは思う。
大事な事は、覚えている筈だ。

その時も。

ヒラリスはちゃんと、自分が何と云ったかを覚えている。

「ではどうか、私に対して先程のような言葉を用いられません様。
立場がなくなってしまうです。」

なくなるのは勿論ヒラリスの……だ。

白の塔で白の位ゝゐを持つ相手に対し。

それは不遜と斬り棄てられても仕方ない態度だった。

当然、美貌の青年が、慇懃な挙措に騙される筈もないと気付いて、なお発言するのがヒラリスなのである。

8話 王族の色彩（後書き）

やっと、神司カンシと太宰タイサイの説明出せました。

燕夜の立場と。

同行者も。

同行者は名前が出せてナイ事に気付き、見直しましたが、掟込めるか悩み中です。

全部、頭の中では終わって、新しい物語が始まっていますのに……
もどかしいですね。

神司は造語、太宰は…地球とは大分違いますねww
仕える相手が帝ではなく神なので、まんま王と云う呼称に。

イシは割と、まんまな説明ですが、そうやって明らかな語源や燕夜が採取した花などに、地球匂わせてますが。

この話には地球は全く出て来ません。

思わせぶりでゴメンなさいm（ー・ー）m

これから、燕夜の過去…リナキアごめんね事件とか、

砂久弥とヒラリスの旅路とか、

女神がアチコチ出没したりとか、

やっと、具体的に話の骨格が。

読んで下さる方に、過去と現在が混乱して判別付け難い……等と云われぬ様に、落ち着いて書きたく思います。

来月から2ヶ月間は土日祝日がお休みなので、更新は休日か、明けた夜がメインになるかと存じます。

次回は11月にお会いしたいです。

お付き合いの程、宜しくお願い致します。

9話 出会い

目覚めたヒラリスは、肩傷の痛みに顔をしかめた。

いや……有り得ないだろう？

その考えに、ヒラリスの貌が引き攣る。

確かめる様に、そつと軀を起こして、静かに腕を回してみる。

痛みの割には、そう酷い怪我でもナイ様で……つまりは更に異常だと云う事だ。

前夜の状態を思えば、有り得ないくらい回復していた。

多分、姫の夢を見たのだろうか？

切ないくらい姫君が慕わしい。そんな気分になった。

いつになく、鮮やかな程の…碧と金赤の眸が焼き付いた記憶の如く蘇ったが、ヒラリスは首を傾げた。

脳裏に浮かぶ美しい幻は、昨日迄よりも鮮やかで、奇妙な程に熱い思慕に駆られた。

いや、勿論…自分は姫に恋い焦がれているとも。と、ヒラリスは頭を振った。

だが、自らに云い聞かせるように恋心を育てたソレと、今の状態

が重なる訳もナイ。

魔法……か。

独り言ちる。

顕著な体調の快復を思えば……やはり魔法の力を否定出来ない。

ソノ術を施した人間が、何らかの魔法をヒラリスに残したのかも知れない。

と、すれば……姫を自分に救わせようとする立場な筈だから……

味方……なのか？

勿論。

断定は出来ない。

クルトに仇なす者も、ヒラリスが恋狂いなのは悪い話ではナイ筈だからだ。

だが、敵に近いとしても……すぐには死なせたくナイのは確かだ。

傷はかなり深かった。死ぬかも知れない、とさえ思った。

少なくとも、アレを今の状態まで回復させるのは、自国クルトでは神に縋る事でしか叶わナイ。

西国の、そしてクルトの、魔法の遅れと受け止めるか。

東国の、魔法の特化と見るべきか。

ここ迄の力だと、先ず平民とも思えないが……と、ヒラリスは考える。

東国で？

トウゼ王に翻意する者が居るだろうか？

無理が有る。

奇跡に近い回復とは云え、未だ完全ではない自分の体調を確認する。

余程親しい者でないと知らない事実だが、左手で剣を遣う彼は、痛む肩が右である事を感謝した。

幼少の折から、右も同じ様に使える様に鍛えてはいるが、真剣勝負なら…左が断然有利なのだ。

とは云え、かなりの回復を認めても完全な復調ではナイ。

「取り敢えず、今日は休むか。下手に進んで悪化させたくない。」

冷静に、ヒラリスは断じた。

勇ましさと無謀は違う。痛みに対する我慢も、この場合は無駄だ。

寧ろ、正しく我慢強くあるなら、休養の大切さを知り、焦りを耐える事だろう。

先に進みたいのは山々だが、大切なのは姫君を救い出す事であり、怪我をおして勇ましく進む事ではない。

魔王と戦う時には、万全の態勢を整えたい。

その為に、東の森の手前でも、休息を考えていた。

魔王に勝てるかどうかなど判らないが、姫君を逃す事さえ出来れ

ば、少々痛め付けられるくらい大した問題ではない。

勿論、「戦うのなら」負ける気は無いが、敵が強大な事をヒラリスは知っている。

ましてや、その敵に出逢う以前に、その辺の盗賊等に殺されるのはゴメンだった。

「莫迦じゃないからね。」

自らに云い聞かせる様に、ヒラリスは呟いた。本当は今にも飛び出したい様な気持ちを宿める為だった。

今日のヒラリスは、やたらと姫君に思慕が募って、気持ちが焦るばかりだった。

左は赫と金。右は蒼と碧。煌めく黎明の月。その美貌………そこ迄想起して、ヒラリスは首を傾げた。

「何かが違う……様な？」

道に迷ったような、奇妙な感覚が心を掠める。

まさか本当に魔法なのか？

いや、やはり焦っている所為だろうか？…そうヒラリスは自得して頭を振る。

洞窟は存外居心地が良い。洞窟にしては……の注釈付きでは有るが。休むと決めても灯火を無駄に使う気にもならず、愛馬の様子も気になった。

食事の必要性も強く感じ乍ら、獲物を狩る体力は大丈夫だろうか
と自問する。

表に出ようとしたヒラリスだが、出口に至る前に足を止めた。

まるでサニールームの様に、吹き抜けになった小さな空間が中庭の様相を呈していた。

小さな…とは大国の皇太子の主観だから、通常の民ならば「宮殿の奥庭の様な別世界だ！」と想像を逞しくするかも知れない。

果実を実らせた木々に、柔らかい芝生。温泉迄有る。

「お前も……無事………と云うか。元気そうだね？」

緑の向こうに愛馬の姿にヒラリスは安堵して、その場所の観察を続けた。

茂み…いや、生け垣の向こうから、愛馬が嬉し気に寄って来て…
…ヒラリスは昨夜は放置した筈の馬が、清潔で艶やかな毛並みをしている事に小さな驚きを覚えた。

…やはり誰か居るのか？

優しく馬の首を叩き乍ら、そう考えたのだが。

それ以前に「此の場所」が「不思議」を抱えていたので、ヒラリスは治癒を施した存在と、愛馬の様子を結び付けるのを保留する事になった。

顕著な人工の痕跡を見出だし、長く手入れはされていない様だが、この洞窟が単なる自然とは異なると強く感じた。

「盗賊でも住まいしていたかと思っただけ……。」

迷い込んだ時は熱の所為と、夜の闇に気付かなかったが、聖なる結界が編まれた石が、自然を装う小路を作っていた。

「いや…無理が有るから。」

王宮の中庭同様に、こんな場所に自然の道など有り得ない。不自然極まりない「自然」に、ヒラリスは苦笑した。

誰か、身分有る人の……隠れ家でもあったのかも知れないな。とヒラリスは考えた。

少し動いただけで、熱が上がり目眩がした。

明かり取りの役目を果たす洞窟の吹き抜けを見上げると、採光は晴れ間そのもので……太陽の温もりを肌が感知するにも拘らず、どうやら外は雨の様だった。

雨は洞窟に落ちる前に掻き消える。

本当に消える訳ではなく、「自然」を模した小さな水香場に苔を飾る石の狭間から「自然」に流れ出る水流に紛れているらしい。

「……………中々芸が細かい。」

この「庭」を編んだのは、かなりの庭師と術師の様だった。

このまま神殿に続いても奇異ではナイくらいの、高度な術を見つけてヒラリスは熱の所為で定まらない思考を重ねようとして……断

念した。

東の森の近隣で、神々を迎えても大丈夫な場所？トウゼ王が関知しない場所だ等と云えるだろうか？

だが、長期に渡り、放置された場所には違いなし、悪意有る者は入り込めない聖なる結界も有るし……。

何より、所詮は坊ちゃん育ちのヒラリスは、ここ数日の旅路で……安全に休息出来る場所に飢えていた。

何か食べないと……そう思った傍から野兎が姿を現したのを発見するに至り……、深く考えるのは止めたヒラリスである。

魔法。
も。

自分に懸けられた、何等かの魔法も、治癒だけかも知れないし、そうでナイかも知れないが……此の場所で享けたからには、そう悪いモノではナイだろう。

そう云う訳で、ヒラリスは暫時の休息を自分に許す事にしたのだ。

それでも、その日から続いた視線が、気にならない訳ではナイ。
いや。

認めるのは釈だが……、多分もつと以前から。

と、なれば自分を治癒した魔法を連想もする。
たまたま多少はマシになったから隙が減じて近寄れないだけで、
もしかしたら……あれからも治癒を施してくれる気が有ったのかも
知れない。

3日を経て、体調は思わしく無かった。
傷は再度痛みを増し、熱も上がって下がる気配もナイ。些細とは
云い難い悪化は、最近の疲労が一気に出たとも云えるだろう。

非常に釈だが……と、ヒラリスは考える。

痛みを耐え、熱がまた高くなったのを自覚し乍ら、このまま再度
倒れるよりも……とヒラリスは考える。

助力を頼む方が、より恥は少ないと見るべきだろう。

せめて。

未だ虚勢を張る気力が有る内に……と。

そう考えて。

その日は朝から機会を窺っていた。

昨日と。一昨日と。

ヒラリスは変わらず洞窟の中での日常を過ごした。けれど、その
気配を完全に忘れる事はナイ。

相変わらず、馬は放置しても誰かが世話をしているかの様に清潔
を保っていた。

この場所なら、飼葉の心配も要らず、ヒラリスは愛馬に対する義
務も、此処では殆ど気にせず居られた。

それでも愛馬を見れば心が和む。草を喰む姿を視線の先に映しつつ、ヒラリスは自らの食事の為に火を焚いた。

肉の焼けるのを待ち乍ら、ヒラリスは地図を広げる。

本来の旅程ならば、この道でも、後5日も有れば行き着く距離だったが、まだまだ敵は多い。

「三弥山にも後2つ。赤鬼党と馬黄炎を名乗る山賊には、どうしても遭遇せざるを得ないか。弥塚の方角なら大きな所帯は無いが、小物が50?……うわぁ面倒くさつ。」

冒険用の地図は危険の印を指し示す。

ヒラリスの地図は高価なだけあってリアルタイムに更新された。

「……………」

どうやら此の辺りにはヒラリス以外にも冒険をする「者」なり賞金稼ぎでも存在するのか、先日地図を開いた時に比べ……明らかに「悪人」が減っていた。

「賞金稼ぎ?まさかな。」

それは滅多に遭遇しない「冒険をする王族」より、尚……珍しい存在だった。

賞金稼ぎは神々の従僕だと云われる。

「神の代行者」を賞金稼ぎと呼ばわるのは不敬と云う者も居るが、

……彼等は自らそう名乗る事も有るらしいから、微妙な問題だった。

——まさか例の治癒者だったりしないかな?

ヒラリスは考えたが、それこそマサカだよな……と自ら否定した。
賞金稼ぎに魔法力を持つ者が居ない訳では無いだろうが、彼等は「賞金首」を倒すのに、相手の能力に準じる獲物を使用する……と云う掟が有る。

武器の種類迄は問われないが、武器を使う者に魔法の使用を赦されない。

武器を使う者が魔法を使えない場合は多いが、対して、魔法を使う者が武器が使えない者は先ず居ない。絶対とは云わないが、得手不得手は別にして、道具を学べば利用出来る能力を有しない者は、滅多に居ない筈だった。

そして、賞金稼ぎは、その惑星に許可された範囲の、武器の使用しか認められて居ない。

性能はかなり良いらしいが、剣を百本持ち歩くより、半永久的に使用出来る方が良からう……との理由が主流の性能だと云うから、推して知るべしだろう。

この惑星は科学を棄てている。

実弾を使う銃の存在さえ、王宮の奥に眠る「歴史的な道具」な訳だから……使える武器の主流は、剣や弓だ。

この星で賞金稼ぎをする能力を持つ者なら、それらの武器に精通し、並々ならぬ技量を持たなければならない訳だが……そんな存在が、魔力も域値を超える？

「有り得ないね……。」

ヒラリスは呟いた。

万が一そうなら、伝説級が存在だった。
それこそ、国を挙げて歓迎するくらいの。

そんな噂は聞いて無い。現在、そこ迄の存在がフライサに滞在する根拠は全く無い。

絶対不在だと云う根拠も無いが。

「この手の強い人が、味方になってくれたら助かるんだけどな。」

倒された「悪人」を検索して、倒した「相手」を表示しようとしたが「？」と成った。

たまたま旅人にヤラレたか、「目的完遂」までの非表示の手続きが為された相手か……と、何件か検索をしたが総て「？」だった。

冒険者には数が多い。目的を持つ賞金稼ぎ？

「って云うか……今すげえ噂が流れてそうだな。」

ヒラリスは自分が倒した相手を避けて検索したが、一般の人間はそうはイカナイ。

その総てをヒトツの存在が為したと云うなら、それはとんでもない存在だ。

ヒラリスが調べた限りでも、十分とんでもなかった。

「しまったな。西なら何とか捜し当てて味方を頼むんだが………」

東国では、噂に過ぎない相手を捜し出せる程のツテを持たないヒラリスだった。

無い物ねだりをして仕方が無い。

ヒラリスは切り替えて、目下の標的に意識を戻した。

魔王に魔法が効果があるとはいえないが、それでも大した存在では有るだろう。

その気配も、ヒラリスがかなり気を付けないと判らない。

治癒の後で判別出来る様になったのだから、それさえも、わざとかも知れない。

多少、自尊心を刺激されはしたが、ヒラリスは明るく声を掛けた。
調度、今日の兎が焼き上がったところだった。

「3日も観察すれば充分だろう？出ておいでよ。」

熱をおして、笑顔を浮かべた。

その笑顔は完全な作り物でも無かった。

ヒラリスは自分では王族として最適化していると自覚するが、実際にはそうでもナイ。

王族なら、自分を失う事を注意深く避けるべきだが、ヒラリスは他者に対する事以上に、自己に対する執着に欠けた。

大概の状況に楽しみを見出だし、明るく軽く、姫に対する心配さえなければ、魔王退治さえ楽しめるだろう。

それで自分が死に至ると可能性さえも、ニッコリ笑って賭の対象にしてしまうのだ。

自尊心は高い。誇りも忘れない。国に対しり義務も忘れたりしない……が、いざとなったら「仕方ないよね？」と棄ててしまえる。

同じく猫被りの東の姫とは、大きく違うのがソコだった。

王子として、口にすべきでは無いから云わないだけで、初めて執着に近い感情を覚えた紫蘭姫を助ける為なら……命を棄てる事になっても、「仕方ない」と思ったし、「悪くない」とも思っていた。

全力を尽くしてダメなら「仕方ない」では無いか？

普通。そんなに簡単に、自然体で、納得したりしない。

ヒラリスも所詮は、神に愛されたモノ独特の……「^{ウッロ}虚」を抱えていた。

ヒラリスの、ともすれば軽薄な誘いに乗った人物は、焚火の向こうにフワリと着地した。

どうやら木の上から観察されていたと知り、流石に少し驚いたが、そんな事より一層……心に響く画を、ヒラリスは観た。

悪びれずに、歩み寄る姿に目眩を覚えた。

蒼い銀の髪は晴れた空の青も含む。金赤？金が混ざるルビーの輝く赤。赫。紅玉と神庭の桃の木の実を混ぜた様な、冷んやりと……だが強い魅了の魔力を持った左の眸は夜の月の紫に色を変える。顕らかな程に、セリカ王族の色彩。

右の眸だけなら西国の血筋を疑える色で、蒼と青が煌めく、髪と同様に昼の空。

白い肌、銀の光を零す睫毛、冷たい美貌……冷やかな月の神々に似た美貌……………。

——姫？

勿論違う。が。

ヒラリスは姫に向かう筈の思慕を一瞬の内に乱されて、苛立ちすら覚えた。

気の迷いにも程が有る、と内心を押し隠す。

気まぐれな猫の様に、気品溢れる生き物が、ヒラリスの横に腰を下ろした。

どんなに粗野に振る舞おうとも、育ちの良さが滲み出る。

そして、その容姿。

「私は砂久弥と云う。旅の同行を願いたい。」

低い声は、季節に例えるならば冬だ。

男の声で、冬の冷然たる厳しさを湛えた声で、自分が蠱惑される訳が無い……筈なのだが。

ヒラリスは砂久弥の魅了の能力が、生来のモノと推察して困惑した。

本人が使う気もナイ「能力」は「魔法」とは見做されず、依って……抗議も出来ないからだ。

紫蘭姫の姿も、その魔力に満ちていたが、もしかして砂久弥のソレは姫より強い。

同行者としては相当嫌なタイプだと云えよう。

命令する事に慣れた者特有の高慢さは有るが、静かな声音で、礼儀正しい問い掛けだった。

ヒラリスに対し、充分な敬意を含んだ態度で有るのも確かだが、淡々とした口調や眼差しは、彼の本心を教える手助けはしない。

表情に欠けた男だとヒラリスは思ったが、不思議と嫌な感じはしない。魅了のチカラも有るだろうが、奇妙な慕わしさを抱かせる……不思議な魅力を感じた。

「うん。で、君はセリカの人かな？」

あつさりと頷いて尋ねたヒラリスを、彼は相変わらずの無表情のまま視つめ、そつと嘆息した。

「そんなに簡単に認めても宜しいのか？私が敵とは思われぬのか、貴方は？」

どうやら呆れている様子だが、それも判然と仕難い口調で有り、表情だった。

砂久弥の真意を読み取る事が可能な人間など居ないだろう。そう思えば、「特別」過ぎる存在に最早楽しくなつてきて、ヒラリスは笑いが零れた。体調は厳しいが、自然明るい笑顔が浮かぶ。

「勿体振って何の意味が有るのさ。それで？僕の質問に答えは貰え

ないのかな？」

柔らかく明るい声に、銀色の冷たい声が応じる。
とんでもない声だ……とヒラリスにして思わせた美声で、彼は静かに言葉を紡ぐ。

「セリカ公家出身。白の塔に所属している。」

「姫君を助けに……ですか？」

頷いて、月の光を纏う美貌が最初の言葉を繰り返した。

「供を許して戴けるか？」

「勿論、宜しいですよ。けれど、白の塔からとは、お早いお付きですね？」

感心して見せたが、当然の事だとヒラリスも知ってはいる。

同様に術を修めた魔王の結界内には降りられずとも、白の塔から一瞬で「此处」に移動して来る事が出来るのだ。

ヒラリスの事情を知っているのも当たり前前と云えた。

「失礼ですが、階級は？」

セリカ公家ならば、辛うじてヒラリスと同等に会話が出来る程度だ。

その人物が「塔」に上がる事で、真実同等になる。

だが、それ以前に王室の人間は「塔」に上がる前に公家に降るのが倣いだから、実際は皇家の可能性が有る上に。

砂久弥の泰然たる態度や、物腰を見る限り……更なる地位も予測された。

「白衣と、青の色を許されている。」

案の定だった。

本来ならば、ヒラリスこそが礼を尽くさねばならない立場だった。

数える塔の中でも最たる位置付けの「白」^{ハク}で、しかも白の位^{クライ}。ヒラリスも流石に退いた。

そんな奴はもつとエラソーにして欲しかった。

ヒラリスはそう思ったが、途端に遜^{ヘリクダ}るばかりの態度が取れる程、可愛気を持ち合わせてもいない。

だが大人だから、とヒラリスは自分に云い聞かせ、慇懃な言葉遣いを採択した。

「参りましたね。ではどうか、私に対して先程のような言葉を用いられません様。立場がなくなってしまうです。」

これも相当不遜な台詞だったが、砂久弥は微笑った。

ほんの微かな笑みでは有ったが、まるで月光が振り撒かれたかの様な、玲瓏たる美しさだった。

昼の月の燦然とした輝きではなく、夜の月の…蒼く冷たい美を砂久弥は湛えている。

対する昼間の月にも例えられるのがヒラリスで、二人が並び立つ様は一幅の絵画の様だった。とは云え、二人以外に人影の見えない此处では、その美を觀賞する存在は、人ならざるモノでしかない。

10話 安息と揺らぎ

「言葉には甘えよう。だが、君も敬語は無用だ。此処は宮廷ではないしな。君自身、そんな事で臆する人間でもないだろう?」

しっかりと見抜かれている。

砂久弥の台詞にヒラリスは笑って首肯した。彼の笑顔は、昼間の月の明るさに輝く。夜の月の化身の如き砂久弥と向かい合い乍ら、臆する事がないのも当然の事かも知れない。

そして、砂久弥はどこ迄も夜の月に似ていた。太陽の光を必要としない月の養い児は、ヒラリスの輝きの前で、尚も冷然と美しかった。

白の塔で高い地位を得た彼に、もはや生家に対する義務も義理もない。なのに、姫君を救いに下りて来た事實は、それだけで何かを勘繰る者が居ると知らない訳もないだろうに、砂久弥はそんな心配など全くしていない様だった。

正しく天の住人だなとヒラリスは感心する。

そこで。

下界の人間としては、どんな下司な勘繰りをするべきだろう?

そう思考が流れるのがヒラリスのヒラリスたる所以である。

その男の指先ひとつ閃かせれば、クルト一国が滅びる危険を承知で……、砂久弥がそんな事をする人物でナイと知れば平然と行動に移せるのがヒラリスだった。

大概の人間は、どんなに相手の人格を信頼しても中々出来ない事だった。

己どころか己が属する世界そのものを破壊する事が可能な、そんなチカラを有する相手に…簡単に平常心を保つ事が、先ず難しい筈だった。

砂久弥にそれだけの度量、懐の広さを感じれば、人を見る目に絶対の自信を持つヒラリスは揺らぐ事がない。

「で？砂久弥は、姫君が好きだったりするのかな？」

「……よくもあっさりと尋くものだな。」

敬語は不要と云われて、あっさり対等の口調に戻し、そんな事を尋いてくるヒラリスに砂久弥は呆れた。

例えクルトの安全を確信しても、普通此処まで図々しくなれるものだろうか？白と青の位を持つ神司は苦笑した。

「確かに好きだが、何故そんな事を尋く？」

「恋敵がそんなに綺麗だと、僕の立場が苦しいから。」

礼節や儀礼を間に挟めば尋くのは難しい。

ヒラリスは苦虫を噛んだ様子で舌打ちをしたいのを堪える。

咄嗟に姫に託つけたが……普通に、姫君に拘らず出逢いたかったと願う自分を自覚して、砂久弥に向かう奇妙な慕わしさを跳ね退けた。

そんなあからさま表情を見せる相手など、ヒラリスには今迄居なかった。

親友である東の我恵那王子も、ヒラリスの事を評する時には食え

ない男だと断じる。まともに恋愛も出来ないだろうと、互いの腹黒さを認め合う仲で……所詮は国が互いの間にあるから、その言動を無邪気に信じ合う事さえもない。

そこ迄の特別扱いを自覚したかどうか？砂久弥は微かに笑んで応えた。

「正直な事だ。だが、愛は深いが肉親の域を出るものではないよ。」

その言葉に嘘は感じられず、ヒラリスは安堵した。
だが安堵する理由も、姫に託すしかないだろう。

「ラッキー。良かった。」

「黒の王子の方が、紫黎花に惚れ込んでいるだろう。彼をライバルとは思わないのか？」

冴え冴えと澄んだ青銀の月が云う。

「そりゃまあ、でも君ほどの美貌が転がってる訳もないだろうし？」

ヒラリスは笑った。正直、黒の王子の事を失念していたのは確かだが、自分の心を追求する気にはなれなかった。

だから、姫に恋痴れる自分が、云いそうな台詞を選んで口にした。

「黒の王子に殺される事は有っても、恋の勝負に負けるつもりはないよ。」

その言葉に、砂久弥の眸が意味ありげに煌めいた。
いくらヒラリスでも、出逢ったばかりの無表情な神司の感情を、

読み取る事は出来なかった。

その右眸が“凍える月”とも呼ばれる2番目の月の如く清浄なブルーに、左眸は4番目の月緋耀か2番目の華月かと云う程に……金と紅蓮の紅玉に煌めくのを、ただ見惚れただけだった。

砂久弥は無表情のまま、セリカの魔力を眸に煌めかせ、淡々と告げたに過ぎない。

「さて、そう上手くいくかな。」

あの日は、結局虚勢を見抜かれてヒラリスが依頼する迄もなく、治療を施された。

月水の原液を砂久弥は所持しており、月光の詰まったそれを、何百倍にも薄めて舐める様にヒラリスは飲んだ。

劇的な変化は、既に語った通りである。

傷の痕跡すら消えた肩、熱も疲労も掻き消えて、寧ろやたらと元気になってしまった。

元気になりついでに、またもや奇妙な夢を見て、砂久弥の貌がまともに見れないおまけ付きだった。

そうして、二人で残り少ない旅路を共に辿る事になったのだ。

この神司は剣をとつても一流で、滅法強い事この上ない。
剣士の質の良さで知られるクルトで国一番の腕を誇るヒラリスで
さえ、青くなるほど凄まじい。

「何で魔法使わないのさ。」

ヒラリスの台詞に、淡々と砂久弥は応えた。

「彼の領域の近くで、下手に術を使うと取り込まれる恐れがある。」

「取り込まれる？」

「端的に云うなら手下にされる。」

「……………」

つまりは、操られるという事で、ヒラリスは笑顔が引き攣った。

こんな化け物に斬り付けられたら、幾つ命があっても足りない。

フルフルと首を横に振り、ヒラリスは云った。

「ご辞退します。」

「そうだろう。」

そして二人して笑った。

起伏に富んだ行程の中、急速に二人は親しくなった。まるで十年
来の知己の様に冗談を云い合って、争いの中では助け合う仲間だっ
た。

だが…………とヒラリスは思う。

まだ三弥山を越えてもいないのに、魔王の結界を気にするだろう
か？

確かに魔王は強い。それは、凄いとしか云い様がない程の強敵で
ある。

出逢ったばかりの友は、ヒラリスが考えた通り、秘密の匂いをさせていた。

月水を与えられ、治癒の術を施された時、ヒラリスは考えたものである。

この神司の目的を――。

姫を救いたいからと、月のひとつである、白華から下りて来たのは、唯それだけの為だろうか？

青位の神司が、その為だけに下界に降り立つ事が、神の認める事であろうか？

身内の救出だ。変な話では無いが………と考える、それでも納得仕切れないものをヒラリスは感じる。

現に、ヒラリスが問い詰めたら、やんわりと躲かれた。

感情の読み取り難い表情で、時に微笑っていても、楽しんでいるのかどうかも判らない瞬間がある。

ヒラリスは、砂久弥の全てを信用仕切れない事が、残念だと感じた。

ヒラリスは誰の事も、心の底から信用などした事は無いし、今後もある訳も無い筈だった。

あの日は一日中付き纏う様にして、質問を繰り返した。

砂久弥はヒラリスのしつこさにも、全く動じた風ではなかったが、夕食の時間に、彼はテーブルを用意しつっ一言漏らした。

「尋いてみるから待つんだな。」

何を尋くのか、誰に聞くのか、テーブルを出し、食事を出現させ、最後に給仕の者まで現れた。

悠俚耶ゆかりやと名乗った少年は、席に着いた二人の為にワインを手に取る事から始めて、かいがいしく世話をし還って行った。

「う〜〜、ちょっと砂久弥。こんな事迄しといて魔王……っと、ごめん。王子の結界がどうか云うのかい？」

「おや、美味しくなかったかな？」

「……………とっても美味しかったよ。昼にもコレが欲しかったと……いや、それは置いといてさ。」

云い募るのを手で制されて、口ごもると、砂久弥はフワリと微笑んだ。

夜の月光の下で、自ら輝く月が、地上で煙る様な笑みを見せる。美は力なり。ヒラリスは溜息を吐いて降参した。

「待つ事だ。じきにお出でになる。」

「誰が？」

ヒラリスの問いに、砂久弥は微笑って答えなかった。

その言葉を蒸し返して、今日もヒラリスは問う。

「ねえ、誰が来るのさ。今夜？明日？いつ来るのかも教えてくれな
いのかい？」

焦れた様な問い掛けにも、砂久弥はただ笑みを見せるだけ。軽く

あしら
遇われてしまう事実には、ヒラリスは軽く感動さえした。

今迄ヒラリスをこんな風に振り回した人間は居ない。
ヒラリスは扱う側の人間であり、操り遇うのは常に自分の方だったのだ。

なのに遇われて、何の抵抗感も無いのである。
自尊心の高さは月をも望む男が、だ。
珍しい事と云えよう。

「ひとつだけ教えよう。お出でになるのは、あの方の気まぐれだが、お約束は戴いた。明日か明後日か……はたまた、黒の王子との対決の時は知らないが。」
「勿体つけないでよ。あの方って誰さ。」

ヒラリスの抗議に、砂久弥はひとつの名を言葉にする。

「リア・リルラ。」

女性にとって最高の尊称である「リア」の名で呼ばれた女性は、女神以外の何者でもない。
しかも、最高にして最大の、頂点に位置する女神である。

「リア・ダ・リアルテ……」

美しい女性に対する、賛美にも似た言葉。
リア・ダ・リアルテ
女神の中の女神。そうヒラリスは呟いて、流石の彼が放心した。

砂久弥はフワリと静かな笑みを見せ、微かに視線を空へと流した。

——これで、良いのですか？

確かに誤魔化せはしましたが……もう少し、教えてあげても宜しいのに。

そんな事を、心に思ったとは、ヒラリスには決して知られる事は無かった。

11話 ささやかな倖せ

東の森は、東の国の総ての森を示す総称ではあるが、三弥山、二久山、一夢山等の1から7迄の数字を備えた、7つ連なる山の中心に位置する、黒の王子が住まいする五幻山を、人は特に示してそう呼んだ。

東国の民は、決して王子を魔王とは呼ばない。

それは、他国にとって自明の理ではあったが、セリカの姫も総てを知る訳では無かった。

皇太子にしか、告げられる事のない事情であつたからだ。

他国の皇太子とて、ただ姫と同程度の知識しか持たない者も居れば、ヒラリスの様に事情を悟る者も居る。

姫君の知識と云えば、黒の王子が本当に王子だという事実と、彼が民たちの善き王であるという事のみ。

彼がセリカの王子だと知つた今も、その知識に然したる変化は無かった。

東の民は燕夜を魔王などと呼びはしない。緑の王。森の王。そして、深い敬意を込めて、東国の王、トウゼ王……と燕夜を讃える。

そう。誰が自らの王を魔王と呼ぶだろう。

掟さえ破らなければ、王は優しく寛大だ。五幻山を囲む中叡あたるだの森

にさえ足を踏み入れなければ、民を仇なす事は無い。

自らの領主が恵み深いなら、そこに魔王という名が生まれる筈も無かった。

あたるだ
中叡の森に迷い込む者にさえ、王は時に寛容を示した。
王は民の悩みを、時にその手で解消してくれる。

あやかし
妖の蠢く森から慈悲をもって自宅に送り飛ばす事もあれば、不作を豊作に変え、早には雨を降らせ、流行り病や治らぬ傷を快癒させる事さえある。

善き民には慈悲が返る。

勿論、声が届かない事も有ったが……それは仕方ない事では無からうか。

その恵みは五番目の山近くの民だけではなく、東国全土に及んだ。

東の者は、自国の王と同じくらい、時には自国の王よりも多少の畏怖を含みつつも、敬愛して止まなかった。

恵みを受けられぬのは、心正しくない者だけだ。

自業自得の不作が豊作になる事は無い。真面目に働いた者には豊かな実りが与えられ、不真面目な者でも、自国の恩恵には与った。時には雨であり、昼の月が照らす恵みである。

彼は、真実と事実の両方にして、東の帝王だった。

彼自身の希みに依り顕らかにされる事はないが、燕夜の下知には、

東の国々の王八名が総て従う。

王は皇太子にのみそれを告げるだけだから、紫蘭が知らないのも無理は無いのだ。

例えば、ヒラリスの様に知ってしまう者がいるとしても、他国の者故に知り得る事柄もある。

姫の聡明さや洞察力をもつてしても、そればかりは叶わない事だった。

ヒラリスはだから、軍を挙げて乗り込む事は出来ない。
クルトとセリカなら、またクルトとトウゼ王個人なら、クルトが勝てるだろう。

だが、東の連合軍とクルトでは勝ち目は無くなる。
どんなにクルトが大国であっても、勝てない相手がある。

だからこそ、燕夜は姫に云ったのだ。

軍が向けられたとしても、それは黒の王子個人との喧嘩。だからこそ、全軍が攻めてくる事は有り得ないと。

東の民としても、王が姫を略奪して来ても、逆らう者は居ない。
例え忠言する者が居たとしても、その者として戦になれば王を護る為に働くだろう。

ただ、略奪された姫君が、東の国であるという一事が、民が素直に花嫁の到来を慶べない理由では有っただろう。

彼は命じれば良かったのだ。

彼女が欲しいと、一言、セリカの国王に云えば良かったのである。

それを、望んで良い様な資格が無いと、自らの心を否定した。事態がどうしようもなくなり初めて、諦め切れないと気付いたのだから世話は無い。

「彼女を誰にも渡したくない。」

そして、今また。

彼はつまらない事を繰り返していた。

誰にも渡したくないと思いつつ、自分のものにも彼は出来ないのだ。

理由は先と同様。

「私には、その資格が無い。」

という、誠に下らない問題からだった。

姫君が決める事であるのだ。そんな事は。

それでも彼は倅せだった。

姫の声や微笑み、そして冷たい眼差しさえも、彼を倅せにした。

美しい姫君と、一日に幾度も会話を交わせる。そして、自ら理由を見つけて訪ねなくとも、時には彼女自身が呼んでくれさえするのだから。

水鏡に紫蘭花姫を映す事は無くなったが、代わりに生身の姫が目の前に居てくれる。目前に居なくても、塔の何処かに彼女が存在す

るのである。

それを想像するだけで、倅せな燕夜だったのだ。

けれど、倅せなばかりでも有り得なかった。

姫君は婚約者のいる身であり、その男は姫を燕夜から取り戻そうとしていた。そして王子は、燕夜の眉を顰ませるに足る、美貌の持ち主だったのだから。

闇の美貌を持つ燕夜とは対象的な、昼の美しさ。輝くばかりのヒラリス王子は、ユーモアに富んだ会話で、女性を楽しませる事も得意そうなのである。

燕夜はヒラリスが嫌いだ。

紫蘭の婚約者でさえ無ければ、好感を抱いただろうが、それ故にこそ嫌いだと感じた。

燕夜は彼の様に、女性の心の機微に聴くあれない。

現役の時代。政治の策謀の最中に身を置いていた頃でさえ、女性の心は不可解であつたのだ。

世捨て人の暮らしを永く続けた彼が、どうしてヒラリスに勝てるだろう。

そう考えて、燕夜は落ち込むのだった。

おまけに、水鏡はもうひとつの、不快な影を映し出す。

「余計な真似を……」

夜と昼に分けるなら、その男もまた夜の住人で有っただろう。けれど闇よりも闇である燕夜と違い、彼は夜の中に射す一筋の輝きだった。

月光の化身を思わせる美貌の持ち主。

冴え冴えとした表情、眼差し、その造作だけで無く、青銀の髪や金赤の眸も、冬の月を思わせる。

だが、ひとつだけ、昼の色彩を右の眸に持っていた。まるで真昼の空の様な、その輝きを反射する湖の様な、深い、深い、青の眸。

彼もまた、紫蘭と同様に、自分と似て非なる存在だった。姫君や、ヒリスと同じ、燕夜が持たないものを持っていた。

そして、無表情に油断していると女性はいつの間にか奴の味方……となる程、女性の扱いに長けてもいる。

不愉快この上ない。

燕夜は砂久弥を知っていた。4代目月神シェンの美しい想い人——人では無いが——である、リルーラ姫のお気に入り。

月の14番目の姫君。又は最後の月の女神。二つの月に住まう姫。女神の中の女神。誰よりも強い力を秘め、誰よりも自由なリア・リルーラ。

そして、誰より美しいリア・リルーラ。

燕夜はリア・リルーラの真実の姿を知らない。

それは砂久弥も同様だろう。

当然の事だった。彼女の美しさは、人間の眸には苛酷過ぎる輝きだ。

人間の姿を纏い、リア・リルーラは時に地上に下りて来る。気まぐれな女神に、セリカの皇太子であった頃の燕夜は、振り回されたものだった。

神殿で祈る習慣に、燕夜はそれでも感謝をした。

その美を愛さない人間は存在しない。特にセリカは芸術を文化を愛する国なのだから。

そして。 リア・リルーラがほんの少し、その姿を解放した事があった。

女神の輝きを、人間の娘の生身に隠して、その姿だけでも奇跡を思わせた。

なのに、女神たる本来の姿を、ほんの僅かとは云え解放したら、それだけで……垣間見た燕夜は、ガクガクと膝から崩れ落ちた。

恐怖に似ていた。

だが恐怖のみで無く、人間が見る事など赦されない禁断の美に、凍りついて、震えて、動けなくなった。

一瞬の事で、すぐに彼女は人間の姿に戻った。

だが既に心臓が締め付けられ、血液の循環さえ正常を保てず、燕夜の強張った身体は、多分そのまま命を落としてもおかしくなかった。

彼女は困った様に微笑して、そんな燕夜に月水を与えた。

魔法のひとつ。治療に用いられるそれは、月の加護が強い者にしか扱えぬ代物だが、リア・リルーラには勿論難しい事では無い。

月の光を一滴溶かしとり、百万倍に薄めた水は、どんな難病にもどんな傷にも効く万能薬で、燕夜の震えも治まり、石化を見せ始めた身体の強張りからもアツサリと解放した。

女神はやはり、困った様に微笑むばかりだった。

時を越える彼女には、その治療がもたらす未来が見えただろう。それでも、月水無しには燕夜が救えない事も、やはり解っていただろう。

そして、そんな近い未来よりも……ずっと、ずっと先の光景

をも、彼女の眼差しは捉える。

だから困った様に彼女は微笑う。

大抵の場合。

倖と不倖の、片方だけを経験する者は居ない。

その日以来、燕夜は人間である事を、少しずつ止めていった。

女神に恋をしたのかも知れない。

もとは神々の飲み物である、月水の所為かも知れない。

彼の心は人間を愛する事を止めていったが、罪を犯すその日迄、
燕夜は自分の心に気付かなかった。

そして気付いた時、彼は五幻山へと逃げ出したのだ。

東国を占める王の住まう城を彼は目指し、そして主を待つ椅子は、
そのまま燕夜の座すところとなった。

死を希み、死よりも重い罰を希求して、得たのは至高の座。

その皮肉は、却って彼を落ち着かせた。

そして燕夜は王としての務めを果たし、罪を償う為に、時を停め
られた命を日々生きている。

死ぬ事も成らず、彼は苦しく生き続けた。

少年の日に垣間見た女神の面差しを、美しい少女に見出だす日迄、
燕夜の心はずっと闇の中に溺んでいた。

12話 東是王

燕夜は逃げていた。

誰も彼を追う者は居ない。燕夜が逃れたいのは自分自身からである。

泣きたくても泣けず。叫びたくても叫べなかった。

それでも心が上げる悲鳴は、彼を脅かし駆り立てた。

常とは違い、楽しむ為に馬を走らせたのでは無い。

ただ苦しくて、恐ろしくて、彼は馬を駆る。

彼を映す眸があった。

哀しそくに眸は閉じられたが、その宝石の色彩はキラキラと空間に漂った。

そこは宇宙の海だった。

白い女神が、何も無い空間に腰掛けていた。

青と緑が濃淡で虹を描き、金で銀で碧の髪が光の粒子を煌めかせた。サラサラと零れた光が、蒼い宇宙に小さな川になって流れた。

彼女の傍らに、慰める様に寄り添う青年が坐す。

黄金の輝きを放つ月神は、そっと彼女の頬に口付けた。

そして、彼女に求愛する多くの神々は、遠巻きに心配そうに彼女を視つめた。

地上を映すのは、彼女と月神の二対の眸だけだった。

火急の用向きならば、通常は移動用の『機械』を使用する。科学は完全に捨て去られた訳でも無かった。

移動に際しては特に規制は緩く、夜会の折もそれは使用される。形式を楽しみつつ、利便を否定するものでも無い。

但し、魔法の代用に近い利用方法で、それを『機械』だと知る者は王族の一部に限られる。

知る者として、あからさまに口にはしない。

転移の魔法陣を模した機械は、魔法力を持たない者には区別など付かないし、力を有する者でさえ区別が付き難い様にカモフラージュしてあった。

民も同じ『魔法』を利用する。

鍬や鋤を

その中のどれだけに『機械』が用いられているか、知る者は沈黙を守るのだ。

下らない掟ではあったが、この星の住民が選択した事でもあった。

鋤や鍬を持ちつつ、ひとつの装置を置いて、植物以外の命を畑から退散させたりした。

勿論、それは法具屋にて求められる、魔道具な訳だ。表向きは。

そんな生活であるから、仮面で顔を隠した青年が操る馬は、注目

を浴びる。

息も絶えよとばかりに疾駆する馬など、賞金稼ぎに追われる『首』でしか無い筈なのだ。

首を振って、苦しげに……疾走する馬に乗る青年。

盗賊の類いには見えず、追う者も居ない様だから、行き交う者は首を捻る。

「失恋でもしたのかね？」

「うわお。それってロマンチックう。」

呑気に噂して、しかしあの仮面は？と、また首を傾げたのだ。

そして顔を隠す事は考えても、移動方法の選択には考えが及ばなかった燕夜と、不倖な疾走馬は、村道の真ん中で……突然姿を消した。

その時、燕夜は闇に飲み込まれる自分を感じた。

底のナイ、闇の中に落ちて行く自分と、巻き添えになった愛馬。意識を失う直前、馬だけでも助からないだろうか……そう思った。

意識を取り戻した時、彼は森の中に居た。川のせせらぎを耳にして、明るい昼の色彩に、草むらから上体を起こした。

そこには一人の少年が控えていた。

少し離れた場所では城を背後に、もう一人の少年が、燕夜の馬の面倒をみてくれている様子だった。

小川の水で洗われて、フルールは嬉しげに嘶いた。いや……あんな無茶をさせても、馬は燕夜を主人と思う事に変わりなく、彼が意

識を取り戻した事に気付いて親愛の情を示した様に見えた。

傍らに控えた少年がそつと身を屈め、優雅に礼をした。

もう一人も馬の嘶きに促されて燕夜を振り返り、こちらは無造作にヒョイと会釈を寄越す。

燕夜は頷く事さえ出来なかったが、少年達の眸には、寛いで座っている様に見えた。

此処は一体何処なのか？そんな事を思ったが、その疑問は少年の言葉で解消された。

真昼の空の様な髪は流石に珍しい。輝く様な笑顔で、少年は城を示した。

「此処は東の森。五幻山です。トウゼ王の塔がアチラです。」

傍らに跪いて告げると、塔を指し示して立ち上がる。

そして、差し延べられた少年の手を取り乍ら、燕夜は塔を見上げた。

セリカの王子をして、美しいと思わせる城の佇まいの中央に、高い塔がある。

「あれが……トウゼ王の。」

「はい。どうぞ、お一人でおいで下さい。私には許されておりませんので。」

そう云うと、少年は貴人に対する礼を取った。

最初の時と同様に、左手を胸に当て、ゆっくりと身を屈めた。

燕夜は頷いて塔を目指した。

どう見ても王族か、それに準じる立場にあるだろう少年が、己に最高礼を尽くす。

その事に多少の戸惑いを抱きはしたが、彼にとっては最早どうでもいい事だった。

燕夜は此処に、死にに来たのだから。

死を望み、死よりも重い罰を希求して、彼は馬を駆けさせたのだ。

そして、塔の高きに臨む。一段一段、足を進め乍ら、彼は救いを希う。

生きて赦される事から……逃れたかった。

誰も責めず。誰もが、彼を慰めようとする。そんな状況から、燕夜は逃げ出して来たのだ。

罰を望み。

死を求め。

そして、玉座を前に、彼は跪いた。

金色に輝かんばかりの美貌の主は、けれど玉座には着かなかった。玉座の傍らを通過して、ゆっくりと燕夜の目前にある、その石段を下りて来る。

「王よ。」

燕夜は訴えた。

「どうか私をお救い下さい。私はセリカの皇太子、梨燕紫夜蘭と申す者。我が王座への権利を、どうか捨てる事をお許し下さい。」
「セリカの王子よ。ならば玉座には誰がつく？」

燕夜に応じた声は、ひどく甘く、優しく、けれど平伏さずにはおれない威厳を備えていた。

誰をも従える美しい音色に、燕夜は震えつつも応じる。

この、圧倒的な敗北感に、懐かしささえ感じ乍ら。

畏怖する程の「美」。女神の輝きに凍りついた自分。

そう。金の王は、女神に似ていると燕夜は思った。

姿形の相似では無く、人の持ち得ぬ「何か」を発するが故に。

それは光で有り、美で有り、力そのものだった。

トウゼ王は、この星総て支配する事を、可能とする存在だと云われる。そして誰も、彼——彼女——に逆らう事など出来ない。逆らおうとも思えない。

それが事実だと、燕夜は今知ったのだ。

「弟に、梨影砂黄景と申す者が居ります。我が弟乍ら秀でたる者。どうか、あれに王位を下さいます様、お願い申し上げます。」

セリカの存続だけは、認めて貰わなければならなかった。王位は最早、彼にとって煩わしいものでしか無かったが、国を自分の所為で滅ぼしては成らぬと考えた。それが燕夜に命を棄てる躊躇させた理由の総てだった。

神々への約定は総ての掟に勝り、一方的な破棄は破滅を呼びかねない。

立太子の典礼を終えた燕夜は、次期王として報告済み……つまり

王位に就く事を神々と約定を交わした事となる。

神から否定する事は出来ても、人の身でそんな不遜は赦されない。王族の無礼は、国を滅ぼす意思を疑われても仕方ないとされていた。

先ずは別の人間に皇太子の座を移す許可を得なければ、燕夜は死ぬ事も出来ない立場に在るのだ。

「そなたを失う事は、セリカには痛手となるう。」

優しい声なのだろう。だが、存在そのものが発する圧力は、燕夜を圧倒し顔を上げる事も出来ない。

重圧に押し潰されそうになり乍ら、彼は耐えるしかない。

「だが、代わりに東国は良き王を得る。」

続けられた言葉の意味を計り兼ね、戸惑ったのは一瞬。把握した内容に、燕夜はパニックを起こしかけた。

「立つが良い。そなたは今この時よりトウゼ王と成る。」

肩に掌の感触を覚えたかと思えば、燕夜は目眩に襲われた。

気持ちの上でも、身体的にも。

軀の内から、造り変えられる様な、一瞬の激痛と吐き気と惑乱と……理解。

圧倒的なナニカが燕夜の中に入り込み、頭の中まで掻き回し、軀中を駆け巡り、総てを『変化』させてしまった。

衝撃を振り払う様に、燕夜は頭を振った。心の何処かで理解した

現実も一緒に、振り払いたかった。

固い表情のまま、燕夜は美貌の主を見上げた。

「何を仰有るのですか……貴方が王でしょう？」

悲鳴にも似た声が、だが力無く発せられた。

だが、燕夜は既に相手から受ける謂れのない敗北感も、震える程の圧倒的な畏れも感じてはいない。

重圧は消え去り、その力溢れる美貌を直視出来る自分に、燕夜は混乱の余り気付けなかった。

金色の主が笑う。

その輝きは流石に燕夜を怯ませたが、それでも眸を逸らす事なく、顔を上げたまま立ち尽くす。

「私は王では無い。トウゼ王は前の者も、その前の男も、みな塔を出て行った。いつも穴を埋める為に、私は人材を派遣し続ける羽目に陥る。」

燕夜は訳が解らないと首を振る。

だが、理解する事は必ずしも必要ではないと気付いた。望むのは罰だ。死よりも重い罰か、せめて死を。

「私は……王と成る為に参った訳では有りません。」

だが、言葉が続け様として、笑みひとつで制された。

唇に、眸に、淡い笑みを浮かべ、その存在は宣告した。

人では有り得ない、美貌の存在は、燕夜に現実を突き付ける。

「これは決定事項だ。」

流石に相手の正体に気付かないままでは居られない。逆らう事など赦されない相手は……それでも、と抗いたい気持ちを、燕夜の眼差しに読み取ったか、単に続けられる筈の説明だったのか。

「そなたは罰を望むのだろうか、トウゼ王は皆そう云う。」

燕夜は困惑も露わに、美貌の存在を視つめた。

直視し続ける事は、多少の負荷を燕夜に与えたが、その苦痛に寧ろ縋る思いだった。

「そう。皆、死を望み此処に来る。だが、死に逃げる事も出来ない己を知ってもいる。」

その通りだった。

死に逃げる事も赦されない己を、燕夜は自覚している。

「そして、死よりも重い罰を求める。死ぬ事も赦されない罪を償おうとして、彼らは此処に辿り着く。」

ならば何故、それが王に成る事となるのか。

疑問は、質問の形で、燕夜に突き付けられた。

「君は今後、何年生きると思っている？」

燕夜は今年18才になる。

東の民の平均年齢は30〜40才。

「永くとも、五百年は無いかと……………」

普通なら…………その筈だった。

17才迄は、1年毎に年齢を重ねる。成長が停止して、次からは二十年毎に。その間は若い軀のまま、ゆっくりと老成していく。

その時間は、今の燕夜には苦しみでしかない。

南の民ならば、百年も生きれば得られる死が、今は羨望を呼ぶ。一年毎に年齢を重ね、肉体迄が若き日の姿からは見る影もなく老化して、死に赴く彼の国の血を畏れる人間は多いが、燕夜はその血に深く憧れを抱く。

なのに…………。

「トウゼ王の地位に就く事は、永遠を意味する。君の軀は時を止め、王で在り続けるのだよ。」

「そ…………それは…………」

先程から、否定し続けた事実を突き付けられ、燕夜は絶句する。

やはり、という思いと、まさか、と思う気持ちが闘ぎ合う。

現在の死のみか、未来の死さえ失われたのだ。

燕夜は嗤い出したくなった。

最早、自分を欺く事も出来ない。

「私は…………既に王なのですか？」

あんなにも恐ろしかった相手。自分より遥かな高みに存在する、

圧倒的な力の差と、人間が持ち得ない美貌。
不死の一族。

既に、気付いていた事実を問う。

「貴方は、神なのですね？」

それは質問と云うより確認だった。
頷いて彼は応えた。

「4代目月神、シエンだ。」

その名乗りに、衝撃さえも無い。
肩に触れた掌は、何処まで燕夜を造り替えたのだろう。

神々に準ずる者に。不死の一族の末端に加えられ。燕夜は、シエンに対する畏れを、自らの意志で抑えられる様になってしまった。

主月神が、遥かな高みの存在なのは相変わらずだが、人間が神に
相対する時の原始的な、生理的なそれは最早ないのだ。

「お尋ねしたい事が有ります。」

燕夜は、自分が人間では無くなったのかと考えた。
だが、それは事実として自覚した後の足掻きでしかない。
口にした質問は別の事だった。

「他の人……私の前の王達は、どうしたのですか？」

塔を出て行つたと云う彼等は、一体どうしたのか。シエンの云い
方は、彼等が王で在る事をやめたと、そう聞こえた。だが、シエン

は永遠に王で在り続けると云ったのではなかったか。

「何故出て行つたかを聞きたいのだね？」

「はい。」

シエンは応えた。

燕夜と同じ心で塔に致り、同じく王と成った彼等のその後を。

「罪が赦されたからだ。彼等は罰を受ける事をやめ、王で在る事をやめ、平凡な倅せを求めたのだ。」

そう云つて苦笑した。

「生きる事が苦で無くなれば、王の地位は恩恵にも成るのに。皆、要らないと云つて、出て行ってしまうのだよ。」

そして、何と云つて良いのか解らぬ燕夜に向かって、シエンは続ける。

燕夜には有り得ない未来を。

「そなたには、せめて千年は保つて欲しいものだね。いや、そうでなくとも良いから、此処でトウゼ王として妻でも迎えてくれたら云う事はないな。」

燕夜は困惑して言葉もない。

シエンは燕夜が罪から解放される事を前提として話をしている。

だが、そんな事は有り得ないと、彼は知っているのだ。

死を希求し続け。

生き続ける罰。

そんな重い罰を与えておいて、一体何を云うのだろう。

「そなたは生まれ乍らの王だ。きっと、罰を終えても残ってくれ
と、期待しているよ。」

燕夜の困惑に気付かぬ訳でも無かるうに、神々の長たる青年は、
云いたい事を云って、姿を消した。

後には、一人残された燕夜のみ。

呆然として、彼は神々の考えは理解出来ないばかりに、そつと
頭を振ったのだった。

女神が与えた月水が、彼の内に眠る『能力』ちからを目覚めさせ、彼は
知らぬ間に罪を犯した。

その力の存在に気付かず、弟を死に追いやったのだ。
そして、弟の死にも、弟を殺したのが己だという事実にも、打ち
のめされる事の無い自分自身に、燕夜は愕然とした。

人間としての温かみを、自らの心に見出だせず、そんな中で、誰
の事も愛してはいなかった事実にも気付いた。
いや、唯一人、愛情のカケラを感じたと云えるのが、皮肉にも命
を落とした弟だったのだ。

他にも弟は居たのに。

自分には妻も居たし、両親だって居た。なのに愛していた筈の彼
等の誰一人として、本当には想っていないかったと知ったのだ。

誰より大切な梨那季亜の死に依って、燕夜は己の罪を知った。
取り戻せない大切な弟を失った一方で、心はもうひとつの罪に悲
鳴を上げたのだった。

助けてくれる相手は居なかった。唯一人、愛せるかも知れない季
亜はもう居ない。

彼に突然発現した“力”に周囲の者は慌てたが、彼を非難してく
れる者は一人も存在しなかった。

誰もが彼に同情し、慰める事に心を砕いた。

神司の修業をしていない彼に、何が出来たと云うのか。皆がそれ
を不倖な事故だと云って、彼を責める事など思いも寄らない。

彼にはそれが何よりの苦しみで、発現したばかりの『力』が暴走
しようとするのを抑え切るのが精一杯だった。

幼い頃に、遅くとも17才迄に、能力は顕れるものには顕れて、
道を示すものだった。

力そのものが、先に顕れる例も無いでは無いが、大抵は、神司な
り導師なりが『印』を見出だし『塔』に修業に出されるのが当たり
前だった。

その為、成長が停止する迄、東の民は皆、定期的な力の有無のチ
ェックを怠らないのだ。

このような『事故』を起こさない為に。

けれど、事故は起きた。

彼の内に眠っていた『力』が、本来ならば、一生眠ったままであ
る筈の『能力』が、導師の『眸』をも眩ませる、深く強いそれが…
…月水に依って目覚め、ゆっくりと頭をもたげたのだ。

妾腹ではあったが、季亜は一番可愛い弟だった。

すぐ下の同母の景影も、仕事では一番頼りになり、燕夜に忠実では有ったが、やはり季亜とは比べられない。

生まれて間もない頃から、自分の後ろをちょこちょこと付いて来る存在が、彼は愛しくてならなかった。

季亜以外に、こんな風に心を暖めてくれる存在を、燕夜は知らない。いや……一人だけ知ってはいたが、その考えは余りに不遜なので数には容れられるものではない。

季亜以上に愛しく、燕夜の心を占めるのは、一人の女性だった。

いや、本当は、一人……とは云えない。その女性は、女性で在る前に神であった。

その女性に対する想いと同じくらい重みを持つものは、燕夜には仕事しか無かった。

王家の務めは、神々に与えられた職務であるから、全うするのは女神への忠節を示す事でもある。

女神に拘らず、嫌いな仕事でも無かった。

寧ろ、企み、陰謀、駆け引き、それらを内包した政治のゲームは、彼を楽しませもした。

季亜より重いものは政せいだけ、冗談の様に口にする燕夜だったが、まさしくその通りだったのだ。

美しい妻が、両親が、弟妹達が居る。

その中でも、一番の美貌を持つ彼は、皆に愛されていた。

王は彼の手腕を自分以上だと認めていて、殆どの政務を彼に任せていたし、早めに王位を譲る事も考えた。

燕夜が二十歳になったらと予定していたが、この調子なら明日にも譲位して大丈夫そうだと、未だ王自身が二十歳にも達する事のない年齢で考えたのである。

民も、兵士達も、燕夜を敬愛した。

倅せの形が、そこには存在していた。

なのに、ひとつの事件がそれを瓦解させる。

音を立てて崩れ散った。

その音色は、皇太子が愛する弟の声から始まった。

「兄様。僕、結婚したくないよ！あの娘、意地悪なんだもん！」

可愛い弟の台詞は燕夜を面白がらせたが、手が空く迄、相手は出来そうに無かった。

皆と一緒に、その愛らしい我が儘を笑って。扉の前に立つ未だ10才に成ったばかりの幼い弟を、外に出す様にと視線で景影に命じた。

「季亜。私達は忙しいんだ。庭で遊んでおいで。」

景影の言葉に促され、大臣の一人が幼い王子を外に案内しようとしても、肩に置かれた手を払った王子は、部屋の中まで入って来た。その利かん気を、一同微笑ましく見たが、忙しいのも確かだった。

「季亜。皆の邪魔になる。出なさい。」

景影の言葉に泣き出しそうになり乍らも、一番大好きで、一番優しい、そして一番年長の兄の足元まで駆け寄った。

「ねえ、兄様。ラズってばヒドインだよ。イジメルの。」

「季亜。悪いが後にしておくれ。ラズイアーリ姫の事も、後で話そう。」

優しい宥める口調だったが、泣き出す寸前だった子供は、頼みの綱にも見放され、盛大な泣き声を上げた。

燕夜は季亜に逃げられた大臣を振り返った。

「波雷、季亜を連れ出してくれるか？」

「はっ。さ、那季亜さま。」

だが、大臣などに負けて堪るかと思ふと手足をバツカセ、季亜は暴れた勢いのまま更に泣き喚く。

神々の怒りを報せる、サイレンの様な声だった。

こうなると、燕夜が話し相手になる迄、収まるものではない。

小さな野獣は誰の手にも負えないのだ。

「兄上。どう致しましょう……コレ。」

既に、季亜に甘い長兄が、仕事を放り出して行くものと決め付けた台詞で、途方に暮れた景影が聞いた。

「どうしたもこうしたも……それは、私がやるしかないだろう。」

仕事が増なつて忙しい中、王は燕夜に任せ切りで留守をし、その上……神への上奏文を要する事案が幾つか。

王宮では除目の季節で叙位の決定や人員の編成、つまりは人事の問題でそうでなくとも繁忙を極めた。

そこに王子二人の縁談が纏まり。特に他星の姫が相手の季亜の件

では、上奏文は必要不可欠だった。

そして、問題無く纏まった景影の縁談は北国の姫との婚約が調った後に、何の因果か到来した銀狼の一族からの求婚。

断つたら色々と難癖を付けて来て、一応神々の系譜に列なる相手だから、やはり上奏文は必至だった。

神々に対する奏上は、幾つかの制約が有り、セリカの国では何人かが心得、権利を有するが、この問題は王族が出すべき文で有り、となると王か燕夜しか居なかった。

他にも細々と厄介事が重なり合い、通常の政務も滞るままにしてはおけないし、誰に任せても決裁は燕夜だし、とにかく大忙しだったのだ。

流石に子供と遊ぶ暇は無かった。

景影は書きかけの上奏文を呆然と視つめたが、燕夜程神々の問題を疎かにする愚を知悉しては居ず、そんな質問も出来たのだろう。

燕夜は溜息を吐き、季亜を見遣る。

「季亜。後でいくらでも聞いてやろう。だから今は勘弁してくれないか？」

この状態でも優しい声で告げたのは、燕夜の自制心の賜物だったろう。

だが、常ならば泣き止む筈の、燕夜からの説得も、この日は効果が無かった。

サイレンは音を大きくするばかり。

大臣達は幼い王子を捕まえる事も出来ない。

執務室には不満と苛立ちが溜まり始める。

このままでは仕事にならず、だのに重要な、とつくに仕上がっているべき案件が書類の形で山を形成し、圧迫してくる。

季亜が姿を見せた瞬間に流れた仄々とした空気は既になく、殺気に満ちていた。

泣いているのが王子で無かったなら、誰が怒鳴り声を上げてもおかしく無かった。それこそ舌を引っ掻き、窓から棄てたい心境だろうな……等と燕夜は考えたが。

そんな彼自身にも、余裕など無かった。

「季亜。いい加減にしないと、窓から放り棄ててしまうよ。仮にも王子なのだから分別というものを弁えなさい。」

だが、やはり可愛くてならないのか、言葉の内容とは裏腹に、優しいとしか云い様の無い声で告げてしまう。

「兄上……甘い。」

景影が呻き、周囲も苛立ちを忘れて吹き出しそうな、甘い兄莫迦振りだったのだが……。

「何だよ……兄様のバカ！兄様は僕より、こんな書類が好きなんだ！！うわああああん！！」

最大のサイレンが鳴り響いた。

事も有るうに、那季亜王子は書類の山を掴んで、窓から投げ捨てた。

その場に居た全員の頬が引き攣った。

そして、いつも、この人だけは怒らせては為らない。そう皆が思う紫夜蘭王子の、低い、低い声が、響いた。

「書類以下だと自ら云うなら、自分がそこから飛び下りるが良い。迷惑ばかりかけるのを権利と思うなら、……季亜つつ！？」

静かな淡々とした口調が、何とも恐ろしい。室内の温度が比喻で無く下がった気がして、皆が寒い空気を耐える中、燕夜は不意に眸を睜った。

「季亜！やめなさいっ！！」

彼等が、王子の言葉に釣られてバルコニーに視線を移した時には、もう遅かった。

いつも、何気なく『遣う』自分の声に、いつの間にか、催眠効果が伴っていた事に燕夜が気付いたのは、その時だった。

そして、医師や導師が集められ、宮廷の中を走り回ったが、それは季亜の為では無く、皇太子の為であった。

季亜の死に依って、暴発した燕夜の『力』は、暗示能力だけでは無かったのだ。

バルコニーから飛び下りる季亜の姿に、彼は叫んだ。

その声と共に、室内に嵐が吹き荒れた。

これ以上、誰も傷付けてはならないと彼は考え、人払いと『塔』に人材の派遣を要請する様に命じた。

彼は誰も傷付けては為らない。皇太子として、自らの民を護る立場に在るのだ。

そして、ふと脳裏を過ぎる考え。

「では私は、王子の立場に無ければ、彼等を守ろうとはしないのだからか？」

それには否定の声が返った。

だが、守りたい……とは全く思わない自分を、その時、彼は自覚してしまったのである。

誰の事も、愛してはいない傲慢な己を、燕夜は知ったのだ。

そして、派遣されて来た神司に依ってしか、押さえられない程に大きな力が、やっと仮の封印を受け入れた頃。

燕夜は既に、自らの心に巣くう、闇の深淵をしっかりと覗き込んだ後だった。

「貴方は自らの力を制御する術を学ばねばなりません。わかりますね？」

「ええ。わかります。」

「これは不倖な事故でした。心の痛手は深いでしょうが、二度と繰り返さない為にも、貴方は白華に赴くべきでしょう。」

種々の塔に至る拠点が点在する、女神の月。17番目の月、白華。そこに行く事は、権利であると共に、義務でも有るのだ。

燕夜は神司の言葉に頷きつつも、何も聴いて無かった。既に、彼は五幻山に赴く事しか考えていなかったのだ。

そして、望みもしないのに、塔で学ぶあらゆる事を、燕夜は一瞬で手にした。

神の御手に依り、罰を享ける為に、それは必要な事だったのだ。
燕夜は自分の素質以上の『力』を手に入れ、けれど最早制御を誤る事も無くなったと知る。

人間では無くなったと知る。

この『力』は人の中には入らない。人には扱えない。そして、燕夜は死なない軀まで、手に入れた。

死にたくて、トウゼ王に謁見を求めたのに、自らがトウゼ王に成った。

それは、何という皮肉だったろう。

彼は季亜の為に黒い衣を着て、季亜の為に自分の不幸を嘲笑った。

そう。その為に彼は此処に来たのだ。

死んでしまった季亜の為に、燕夜は望み通り、死にたくても死ねない不幸を得た。

哀しんで、苦しめ。

季亜の為に。

季亜の苦しみ以上に、私は苦しまなければ為らないのだから。

燕夜はそう考えた。

決して、季亜はそんな事を望みはしないと知りつつも、他に方法を知らなかった。

燕夜は自らに生き続けるという罰を課される事を良しとした。

それは彼には何よりも苦しい、何よりも重い罰だったが故に。

主月神が愛するリア・リルーラの要請の下に、セリカの王子を皇太子から外し、塔を与えた。

力に目覚めし者が塔に至る義務は、五幻山の塔のみ形が変わる。

そこは東国を統べる王のみの塔。

王に帰属する塔。

神が撰んだ王に従い扶けとなる。

そして、此処に永年のトウゼ王が誕生する。

神々の太宰。当人が意識しないまま神司の資格も得ていた為に、単なる太宰ではなく、彼自身が神として君臨する事を許された王。

トウゼ王。

神々が望んだ王。

燕夜は知らなかったが、その名は生まれる前から彼のものだった。

東の王は是なり。

神々の祝福は、総ての王家と神殿にて謳われた。

燕夜は、それも……ずっと永い間知らないまま、王としての義務を果たし続けた。

知ったなら、何と面倒な罰だろうと嗤った事だろう。

そんな祝福は、正直迷惑でしかなかった。

13話 背中合わせ

あのテーブルはもう出ないのかなあ……と、こっそり残念に思いつつ、焚火に翳し地面に突き刺した串に、ヒラリスは手を伸ばした。やはり、アレだろうか、近場の魔法は魔王に気付かれちゃうって話なのだろうか。

砂久弥の言葉を思い出し、ヒラリスは一応王子の自尊心を大切に
して、余計な事は云わなかった。

あっちが食べたいなあ、等と口にする事は一国の王子として情けないではないか。

「そっぴや、砂久弥は黒の王子と個人的に面識有るの？」

代わりの世間話は、だがちょっとした衝撃を呼んだ。

砂久弥があっさりと頷いたからだ。

「ああ。」

「え？マジ？」

ヒラリスは驚いた。普通云わないか？そっぴや事は尋かれなくても云うんじゃないのか？

「へえ？どんな奴？」

内心盛大に苦情を述べた。しかし、それを押し隠して、普通にのんびり尋ねたが、すっかり奴呼ばわりだった。

「良い奴だよ。」

砂久弥は特に気にもせずに応え、五幻山の方角を眺める。

無表情に近いが……ヒラリスには思わし気な、……黒の王子を案じるかの様な眼差しに感じられて、一瞬だが強烈な苛立ちが沸き立ち抑制した。

ヒラリスには関係無い。例えば、砂久弥と黒の王子が知り合いとして、その付き合いが存外深いもので有ったとしても。

そう。

黒の王子が、どんな想いでトウゼ王の座に就いたかを知ったとしても、それが……女神の素を両の眸に映した所為で、心が欠けてしまった事が、そもその原因だったと知っても……ヒラリスは気にしないだろう。

実際に目の当たりにしても、そんな甘ちゃんをせせら笑っただけだろう。

黒の王子はヒラリスにとって、もっか最大にして最強の敵で有ったのだから。

そして今も、黒の王子様さえ存在しなければ、こんな状況は無かっただろう。

三弥山を漸く後にしようという場所で、彼等は昼食を終えた訳だが……ヒラリスは妙な感情を忘れ、砂久弥も五幻山の空など眺めている場合では無くなった。

六京山の最大の派閥を持つ、名高い山賊が一斉に襲い掛かって来

ただ。

「魔法で解んなかったのかい！？ねえ、青の導師様つつ！！」

「使ってもいないのに、解る訳が無いだろう。それこそそんな事も解らないのかつ。」

罵り合いつつも彼らは敵をぶった切る。

何でこんな事に……と、襲われる度に思うが、仕方が無い事かも知れない。山賊にしてみれば、も彼らは他人の縄張りを勝手に荒らし回っているのだから。

彼らが例え、通過するだけじゃないかと主張したとしても、そんな云い分が通用する筈も無い。

そして、多勢に無勢どころでは無い敵の数に、二人と二匹の馬は、しつかりと……はぐれてしまったのである。

しまった……と呟いた時には遅かったのだ。

砂久弥に近付こうにも、間には沢山の雑兵……もとえ、悪人たちで溢れていたのだ。

敵を斬り捨てて、もう一度砂久弥を探す為に視線を動かす余裕が出来た時には、すっかり姿が見えなくなっていた。

「とんでもないなあ……つと」

振り下ろされた剣を咄嗟に避けて、ヒラリスはひょいと手近な男の首根っこを掴んだ。

二度目の襲撃を躲しつつ、他の敵からの攻撃の盾とした。

すっかりその男を斬ってしまい、新しい敵が猛烈に怒り狂ってヒラリスに突進して来た。

「おっと、……あ、ラッキー」

ヒラリスは避けた拍子に、そのまま目前でバランスを崩した敵の背中を思い切り足蹴にした。

思った通り、道が開ける。

何とか作ろうと苦慮していた突破口である。

「あつとゴメンね。君も、君もね。はいゴメン。」

何がゴメンだと叫ぶ男の頭も断ち割って、ヒラリスはもう一度、悪びれずにゴメンと云った。

後は走るのみである。

右に左に剣を振り下ろしつつ、とにかくヒラリスは走った。

「うわっと。よいしょ……っと。あらよ。」

木々を盾に逃げ続け、時に敵に斬りつけ乍ら、走り続けた彼の目前に高い茂みが現れた。

その手前に立つの敵の腹をザツ——！！と横薙ぎに斬り払うと、そのまま倒れ込んで来る男の肩に手をかけて、勢いを付けて飛び越える。

茂みの向こうには、しかし敵が四人。

ヒラリスはスツと冷えた眼差しで四人の位置を見て取った。

地表目指して落下し乍ら、先ずは一人の頭を蹴り上げ、蹴った頭

にそのまま蹴り潰す勢いで足を下ろし、ガッツリ地面まで体重を掛けて着地し乍ら、右手に立つ男を剣で突き刺す。

返す刀で左手に薙ぎ払い、三人目を斬り捨てた。

「ヤリイ。僕って天才かも」

返り血に塗れ、口にする言葉はひどく軽い。

戦場などでは、却ってオチャラケてしまう性格であった。

「だあって正気で人なんて殺せないもんね。僕って平和主義だからあ。」

解るでしょ？と最後の男に問い掛けると、相手は奇声を上げて突っ込んで来た。

「バケモノがあゝっ!!」

「し……っつれいだね。……君でしょ。それは。」

足元に転がる、出来立ての死体に云い置いて、ヒラリスは逃亡を再開した。

砂久弥の無事に関して、彼は心配していない。

ヒラリスが心配なのは、彼が自分を見付けてくれるかどうかである。

「まさか、こんな時まで結界がどうのって云わないよねえ。」

眩きつつ、敵を倒し乍ら走り続けた。

体力は無限では有り得ない。

取り敢えずは、何処か身を潜める場所を見付けなければならない

と、そう思った。

今は未だ、考えるべきでは無い。戦場にしろ、王子の冒険にしろ、何で命のやり取り等が必要なのか、ヒラリスには理解出来ない。神々が統べる世界で、望めば完璧な平和だって叶えられる筈だった。

下らない理由で、だが神々との掟に反しない戦を仕掛ける国や、せつかく平和に生きられるのに、わざわざ刺激を求めて山賊などやらかす逸れ者。

世の中みんな莫迦ばかりだ。

ヒラリスはそう思ったが、実際に今の世界に生きて、その戦闘の場に在るなら……いちいち考える事は自らの命を縮めかねない。

自分が死ぬ気などは更々無くて、だからヒラリスはこんな時は何も考えない。

血も、絶える命も、残酷な光景の総て、何を見ても心を動かさないと決めている。

そんなヒラリスが指揮官として、戦士としても、総ての戦闘に秀でた能力を発揮するのは、皮肉な話ではあった。

砂久弥は基本的に誰にも云わないし、その欲求を積極的に叶えようもしない。

だが、その一点で、自分が壊れていると知っていた。

砂久弥は人と斬り合うのが好きだ。

だからこそ、女神は彼にヒラリスの護衛を命じたのである。

とは云え、人を殺すのが好きなのでは無く、殺し合う緊張感が好きなのである。その緊張感の中、打ち勝ち、敵を倒す。

それが、砂久弥の楽しみであった。

どちらにせよ、褒められた趣味では無い。

だが、砂久弥は思うのだ。こうして敵を斬り結び乍ら、考える。

彼らだとて、好き好んでこんな商売をしているし、此処に居る人間総てを、一瞬で消滅させる武器も存在するのに、自分も含め皆が剣や弓程度しか用いない理由というものを。

結局、人間は争いが好きだよな。と結論は出て来る。

それのみでも有り得ないが、血を嫌う人間ばかりで無いのも確かだ、と砂久弥は思う。

好きなだけあって、彼は流れる様に剣を操る。

流麗な動きで、敵を屠り微笑う。

戦っている時の彼の笑みは、酷く鮮やかで、この上なく美しい。

それこそ、神々に愛でられるのも頷ける程に。

優しい気に、愛おしむ様に、そして酷く楽しそうに、彼は血を溢れさせ倒れゆく敵であった存在を視つめる。

彼の周囲にいる敵は一人減り二人減り、そして砂久弥を取り囲む

男達は、自分達が一体何をしたらだろうと、我が身の不運と不倖を嘆き、逃げ出したり、数だけを頼みに襲い掛かったりした。

彼は彼の愛する敵に、大抵愛して貰えない。

彼らは、きつと許されるなら、砂久弥が先程思い浮かべた武器を使用しただろう。

ただ、どんな星にもルールが有る。

武器の名で使われる物に限っては、娯楽のみで剣だの弓だのを使う訳では無いのだ。存在しないだけである。

そして造る者が居たなら、彼は国や神々に罰を与えられる。使用する者にも、それは同様の事が云えた。

砂久弥と違って、彼らはそれらの武器を、使用しないのでは無い。使えないのだった。

この場合、砂久弥を喜ばせる為の掟に見える光景ではあった。

その剣は、どんなに血の脂に濡れても、決して切れ味の変わらないものだったので、砂久弥は敵を斬っては放ち、斬っては放って足を進めた。

結局はヒラリスと同じ行動なのだが、砂久弥の場合、逃げているのは敵の方なのである。

彼に出逢った事を、生き残った者は、きっと生涯忘れられはしないだろう。

彼との遭遇を機に、真人間に立ち返る者は多い。きっと、今日の彼らも、身に染みて知った事だろう。

人間には、己には分を弁える事が必要だと。

砂久弥は口の端を笑みの形に変える。

この場でさえなければ、誘い込まれずにはおれぬ妖しい迄に艶やかさだ。

普段の砂久弥を讃えるなら玲瓏。同じ貌の別人が居るかの様だった。

凄艶にして、凄絶。

だが、その笑みに誘われる者は一人として存在しない。

「ひっ……！」

砂久弥の眼差しが注がれれば、一人、二人と逃亡に移る。

手近な者はフワリと飛び掛かり斬り捨てたが、他の者は追い掛ける迄も無い。

「山賊退治に來た訳でも無いしな。」

そう云いつつ、それを一番残念に思うのは外ならない砂久弥だっただろう。

彼はスツと右手を上げた。

逃げ遅れ、すっかり腰を抜かした男が、それだけで悲鳴を上げる。だが、劍の柄を残して、刀身が掻き消えた。代わりの様に、それは弓の形を成して砂久弥は矢をつがえると、すっきりした姿勢で無造作に放った。

矢の数に限りは無く、弓に添えた手の中に次々と現れるのだ。そして、砂久弥は身体の向きを変えては次々と射た。

狙い撃つのは劍と同様、砂久弥の腕である。

性能がいくら良くとも、見合う腕前が無いとクズでしかない。そして、その性能も、砂久弥の好みで、ごく普通の劍と弓の働きしかないのだ。

材質や切れ味、形を変化させたりの二次的なものはアップしてあるが、勝手に照準を合わせたり、敵に斬り掛かる様な武器は、砂久弥の好むものではない。

そして、彼は下手な万能の自動の弓矢や劍よりも、余程確かな結果を残した。

あっという間に、眸に映る敵を葬り去り、彼はずっと腰を抜かしたままの男に視線を移した。

「ひつつ！た……たすけっ……助けてくれっ！」

この男が、助けを求める相手を許してやっていたとは思えなかった。逃げる敵も、助命を嘆願する者も、きつと殺してきた男達に、砂久弥は容赦を与える積もりは無い。

砂久弥は本気で斬り合う闘いを好んだし、そうやって倒す方が楽しめる。だからと云って、逃げる者を見逃す理由には成らなかった。つまらない逸^{はく}れ者など、一人でも減った方が良く考える砂久弥だった。

そこに新たに近付く者達がいると砂久弥は気付いたが、気にもしなかった。

先ずは目の前に居るそれを始末しようと考える。

「おま……青い髪。蒼月の利夜！？」

ゆっくりと近付いて来た砂久弥の容貌に、記憶を刺激するものがあつたのか、その青銀の髪のみを頼りにした言葉が、目の前に下りて来た刀に向かって叫んだこの言葉が、男の末期となる。

砂久弥は珍しい表情をした。

あからさまな嫌悪が、その眼差しに表れていた。

「それは私の相棒の名の様だが、私をあんな化け物と一緒にしないで欲しいね。」

同性でさえ妙な気分になる低音が、不快そうに告げた。だが、それを耳にした男達は更なる恐慌に陥っていた。

カシャンと砂久弥は剣の柄を握り直し、振り向き様に一閃を放つ。

「背後からの攻撃とは卑怯者が揃ったものだな。」

五人が斬り掛かり、三人が一瞬で屠られた。男達は倒れた仲間より、砂久弥の言葉より、尚先程聞こえた声が脳裏に焼き付いた様だった。

「じゃ……っじゃあ、砂久弥っ！？夜月の砂久弥が何でこんなところにつっ！！」

利夜よりも砂久弥の方が怖いと云わんばかりの態度は、不愉快極まりない。

砂久弥の最新の記憶に依れば、女神に相棒として押し付けられた……もとえ、無理矢理組まれた……もとえ、面倒を……とにかく、その時の利夜は、盗賊の村ひとつを丸ごと火炙りにした。

人肉が焦げる臭気と、その悲鳴は、砂久弥の美学とは折り合わないかった。しかも、残酷が過ぎるというものでは無いか。

砂久弥を前にした男達が、利夜と砂久弥のどちらを優しいと思うか……彼らにして見れば恐らくは、五十歩百歩と答えそうなものだった。

現に、砂久弥は夜月と呼ばれ、利夜は蒼月と呼ばれる。

蒼月は夜月の別名だったのだから。

「ひっ！夜月の砂久弥っ！」

「青い髪の砂久弥っ！」

もはやパニックしきりの山賊は、どいつもこいつもへっぴり腰で、

砂久弥は全然楽しめそうも無いなと更に不機嫌になった。

利夜とは違い、殺戮自体を楽しめる趣味は持ち合わせていない。

しかも、青い髪呼び名は非常に不愉快でもあった。

「人の名をよくも好き勝手に呼ぶものだな。」

つまらない相手ばかりで、つまらない事ばかり云う。しかし、逸れ者なら知らぬ者が居ないと云われる迄になった、その仕事は、きちんと果たした砂久弥だった。

さっさと片付けてしまうに限ると彼は思い、その通りに実行して、砂久弥は嘆息した。

これを締めとするには、随分とつまらない相手だったからだ。

やはり最後には腕の立つボスキャラに出現して欲しい。

無い物ねだりを砂久弥は内心願いつつ。

「まあ、いいか。」

と、呟いた。

14話 女神の愛し子

水鏡を見下ろして、溜息を落としたのは、黒の王子燕夜である。

「相変わらず常識外れな……………」

知ってはいたが、砂久弥の強さはとんでもない。

燕夜が言葉を失う程だった。

取り敢えず、東の王としての“力”を授けられているから、魔法でなら断然自分が有利なのだが、あの剣には警戒を忘れ得ない燕夜だった。

「まったく。リア・リルーラも余計な事をして下さる。」

一人言ちて踵を返し、ギョツとした。

「余計な事…………どの辺りが…かしら？」

視線の先には、碧シヤスタの月の姫君がフンワリと微笑んでいた。

「リア……………」

絶句しつつも燕夜はすぐさま跪き、淡い紫のドレスの裾に口付けた。求婚、または最高の貴婦人に対する挨拶。燕夜がこの礼を取るの、リア・リルーラと紫蘭花だけだ。

口に出せない求愛の代償行為の様なものかも知れない。

「先ずは、ご無沙汰をお詫び致します。」
「ほんとに……」

十七の月の内でも、一番の美しさを誇る14番目の月の姫君は、その月と同じ色彩を持っている。

シャスタ《碧の月》の名のままに、緑や青を基調とした、綺麗な色彩が踊る髪。

シャスタは、女神を生んだともされる世界では、非常にポピュラーな花の名前だとも伝えられるが、しかし正式なその名前で呼ばれる事は少ない。多く口にされるのは、碧の紫月。

通り名に含まれる八番目の月紫月は、紫の色がクルクルと色を変える宝石と同じ名前で、その名を冠される碧の月も、時に深い緑に、淡い青にと、緑と青のバリエーションを美しく奏でる月だ。

リア・リルーラの長い髪と同様に。

美しい眸も、紫月の様に色を変える。紅に金に、そして紫に……。

総ての色をそなえた眸と違い、髪は月光色のみだ。とは云え、十六の月を揃えれば、どんな色彩も可能だろう。

だが、リルーラ誕生を祝い生まれた十七番目の月が、時に輝く虹色よりも、白華の名のまま白銀の月と謳われる様に、リルーラの美しさは碧の月に例えられる。

彼女の本来の姿は、金で銀で白で、そして何より碧……緑と青だった。

「久しい事。私を呼ぶともせずに、つまらぬ事をする様子。仕様の無い事だと思い……来てしまいましたのよ？」

「つまらぬ……事ですか。」

一瞬、燕夜の頬が引き攣り、けれどすぐに眸が放った強い光と共に収まる。

残るのは、微かな陰。

「硝紫は……美しさも然る事乍ら、その心も気に入りました。そんなの妻としても申し分ない娘の様ですね。」

「リア？」

何を云い出すのかと、燕夜は慌てて顔を上げた。

リルーラはその傍らを音も無く歩む。

零れ落ちる光の雫が小さな破片を燕夜に突き刺した。

昔はこれで、心を失う羽目になったが、現在の彼にはリルーラの輝きが増したとを感じるだけで済んだ。

燕夜がリルーラの姿を追って振り返れば、そこには巫女姿の神が女神を恭しく女神を迎える。

そこには無い筈の長椅子。銀の硝子で出来たテーブルとそこに置かれた月水酒も、この城には無かったものだ。

燕夜はそんな事に驚く訳も無く、女神の後に続いて、進められるまま腰を下ろした。

「解っておりますか？つまらぬ事とは、硝紫を掠って来た事では無い。ヒラリスを敵とした事ですら……それは無いのです。」

「リア………ですが。」

伏せられた眸が燕夜を見て、彼はそつと視線を落とした。

その意志ではなく、美に気圧されたのだ。

もはや最高神である主月神の姿を前にしても動じずに在れる燕夜

だが、リア・リルーラには未だに凍りつきそうな時が有る。それは昔日の名残か、それとも恋を引きずってでもいるのか、恐れ多い事だと思いつつ、燕夜自身にも解けない問題だった。

ただひとつ云える事は、リア・リルーラと紫蘭花のどちらに恋をしているかと問われたなら、彼の心に浮かぶのは紫蘭花の顔だと云う事だけだった。

似ていると思ったからでもなく、その魂に……ずっと魅せられて来たのだ。

それでも、いや、だからこそ……と、燕夜は思う。

「私は彼女に相応しく無いのです。そんな資格は……」
「無いと誰が決めました？」

リルーラが燕夜の言葉を奪った。
今は虹の光彩を放つ眸を細め、光輝を零す声が……まるで人間の様に、下世話な言葉を発した。

「あほう。」
「あ……阿呆？」

燕夜は茫然としたと云って良い。

「阿呆で無ければ、莫迦です。間抜けです。唐変木です。全く、そなたは昔から妙に……」

罵倒はしかし優しく、微笑は慈愛を示す。愛しい我が子を見つめる母の眸に、それは似ている。優しい暖かい波動が、煌めく光の色彩として燕夜に届く。

言葉と寄せられた御志の乖離に、人間として育った燕夜は未だに

戸惑う事が有る。

そこに乖離を感じる事こそが、元人間……なのかも知れないが。

「そんな話はしていないわ。そなたが莫迦な考えをして、その上で為すだろつ事を云っているのよ。」

昔、燕夜がセリカの王子だった頃、共に遊んだ少女そのままの口調で、リルーラは語る。

あの頃の様に、口は悪くとも優しい「人の子」に対する慈愛の眼差しは、創世より存在し続ける女神のモノ。

少女の顔でも、女神の姿でも変わる事は無い。

少女とも女性とも云い難い美しい女神。

「リア。ですが私には、彼女を娶る資格が無いのです。私の罪は消えず、彼女は余りにも……美しい。」

「そなたも美しくてよ。」

苦悩に満ちた台詞も、女神は一笑に付す。

巫女が注いだ月酒の杯を傾け、女神が告げれば、燕夜が頭を振って訴えた。

「姿の問題ではなく、心の……魂の問題ですつ。私は……」

燕夜の言葉を女神は微笑う。

女神に付き纏う静寂の気配が楽しそうな空気に変わった。

人間の子を誰より愛しむ女神も、結局は神に外ならぬ。

神から見れば、人間の世は娯楽の様なもの。

「神と人間、どちらが美しいと思うの？そなたも硝紫も、所詮は力無い人間に過ぎない。神の中に在れば、その“美”《チカラ》を競

う者の仲間にも入れまい。」

白く美しい織手が閃き、次の瞬間銀の扇を持つ。

口元を隠す扇は、だが女神の眼差しに浮かぶ楽し気な笑みを却って際立たせ、燕夜はうっかり見惚れそうになる。

だがその言葉には納得仕切れないものを感じた。確かに女神の云う事に誤りは無い。それは理解しても、自分の心の美など認められはしなかった。

「それは……確かに愚かな事を口走りましたが……………」

燕夜は口を噤んだ。

聞き分けの無い子供に対する様に笑われるのは、多少不満だった。例えその笑みが何にも変え難い程に美しくとも、その笑声が神々の奏でる音楽よりも素晴らしくとも……………である。

「そなたは変わらぬ。出逢った頃のまま、愛らしい若者です。」
「……………」

魂は容れ物に引きずられる。器が変わらないなら、中身が変わらないのも仕方が無い。

だが……愛らしい等と、云われたのは初めてだった。
頭の中が真っ白になった燕夜である。

「あ……………貴女は、私を揶揄う為にわざわざ降臨なさったのですか？」

「今度来る時は、それも良いかも知れませんか。」

立ち直る為に発せられた問いは、軽くいなされた。

天上の声が銀色に輝く笑声を奏で、揶揄する様に言葉を綴る。

黒の王子も、女神の前では『愛らしい』子供なのである。

そして女神は立ち上がる。

慌てて後に続く燕夜の眸に、優しい眼差しが映る。

「ひとつだけ。そなたの美は、そして資格とやらも、そなたの想い人が決める事ですょ？」

そして、またもクスクスと微笑った。

「楽しませて貰いました。礼を云う。」

次の瞬間には。

キラキラと、碧や銀や金の輝きだけが残された。

燕夜は呆然として、溜息と共に、そっと独り言ちた。

「神々の気まぐれになんて……私は慣れている。」

確かに、リア・リルーラは女神だ。

誰より美しく、美を競い合う神々たちも張り合わぬ程に、彼女は至高の存在だった。

だが。

末端とは云え、燕夜もまた、神々の柱に数えられる存在だった筈である。

振り回されるだけの人の子のような表情を、燕夜は浮かべていた。

リア・リルーラは月に還った訳ではなかった。

ヒラリスとはぐれたのを倅いに、経過報告を兼ねてリアリルーラを喚んだ者が居たのである。

云う迄もなく、それは砂久弥であつた。

彼は小さな泉を見つけると結界を巡らし、外界と自らが立つその場所を遮断した。

泉の傍に、上等な長椅子と月水酒を満たした杯を用意した小テーブルを出現させ、跪いた。

「総ての神々の中でも稀なる美貌を誇る女神よ。月の王、大地の王、風の王、多くの神々の求愛を受けし御方よ。始祖にして雛たる至高の女神。四代目の主月神に愛されし唯一の姫君よ。我は17番目の月にて育まれし僕^{しもへ}。ただ月姫に仕えたと願い叶えられし者。姫君よ、14番目の月姫リア・リルーラ。我が声をお応え下さいます様。

「……………その喚びかけ、恥ずかしいからお止め。」

何度も告げた筈の言葉を、顛れたリア・リルーラが云い、砂久弥もまた、常と同様に返した。

「リルーラ様。月姫^{レイディ}のお言葉ならば、他のどんなご命令でも聞きましよう。が、姫君ご自身を軽んじる事だけは応じかねます。」
「……………そなたはくえぬ。」

月姫は扇の影で、ほっと吐息をひとつ。

それでも愛し子を見る眼差しはそのまま、彼女が砂久弥をどれ程に慈しんでいるかが知れる。

結局彼は彼女の掌の上で、真に女神が嫌がる事なら出来る筈も無いのだが、その少しばかりの融通の利かないさが、却って女神を楽しませた。

砂久弥の生真面目さは、装ったものが大半だが、彼女の尊厳に拘わると彼女以上に――彼女より彼女を疎かに扱う者など居ないが。――こだわりの持つ。

「姫君。取り敢えずご報告を。」

「そう。私はどうでも良いのだけれど、ヒラリスに援護を上げた方が良いのではなくて？」

ハッと顔を上げ、その圧倒的な『美』^{ちから}に凍りつきつつも、砂久弥は言葉を返す事を忘れなかった。

短期間とは云え、同じ時を過ごしたヒラリスへの友情故かも知れない。

「彼は……今？」

女神が白い御手をあげ、一差し指が指し示す方角に砂久弥は目を凝らした。

女神は砂久弥が『力』を使う迄もなく『見える』様に、その光景を空間に映しあげる。

「これは……。」

白く細く長い指。綺麗な一差し指が、つい…と流れた後には、結界の外から中は見えなくても、内からは変わりなく見えていた景色が変容した。

そこは、やはり山の中では有ったが、森林を抜け随分と見晴らし

が良かった。そして、そこに群れを為す狼。

「この……向こうに、彼は居るのですか？」

「居た。と云うべきかしら。」

「姫君？」

当惑して見上げると、羽扇で顔を半分隠したまま、彼女は困った様に吐息した。

キラキラと碧の髪が銀の光りを零して揺れる。

「手が焼ける事。」

「姫？」

その見晴らしの良さは、そこに続く道が無い故だった様だ。知らずに近付けば、足を滑らせ落ちるは必至。

リア・リルーラの意志に依るものか、ゆっくりと進む映像に砂久弥は息を飲む。

かなり急な崖だった。

砂久弥は、此处からヒラリスが落ちたのかと、微かに胸を痛めた。

狼が一匹。崖の淵まで行き、唸り声を上げた。

身ごなしはかなり軽い筈なのに、足元の岩が崩れ、カラカラと落ちていった。

諦めたか、狼の群れは森に姿を消し、崖から落ちかけた狼も後に続いた。

カラ……と、音は小さくなって消える。それでも、未だ底に到達してなかったのか、暫くして、小さな……それは微かな音ではあったが、パシャンと、水音が耳に響いた。

「ここから落ちて……助かるでしょうか？」
「無理でしょう。」

あっさりとした返答に、砂久弥は蒼褪めた。

「彼は……気持ちの良い男です。私は、シャランの死も見たくは有りませんが、ヒラリスが死ぬのも見たく無いのです。」

凝つと、静けさを取り戻した崖を視つめ、砂久弥は唇を噛んだ。
砂久弥がこんな顔を見せた事が無いと、女神は知っている。

「どうか姫君。私の願いをお聞き届け下さいますでしょうか？」

女神を振り返り、必死に訴える愛し子に、リア・リルーラは扇の影で微笑う。

「そなたらしくもない。その願いは不要と思いなさい。」
「……………はい。姫君。」

リア・リルーラの言葉は自らの命より重い。そう砂久弥は考える。
その言葉に、即答出来なかった。
搾り出した声も、震えた。

逆らう事はしない。それは、砂久弥の人生総てを否定する行為だが。

云い知れぬ痛みに、砂久弥は齒を食いしぼる。ヒラリスの笑顔が、もう見れないのかと思えば、その心が……言葉に成らない悲鳴を上げた。

たかが、数日の付き合いだ。燕夜がヒラリスに倒されたなら、自

分こそがヒラリスを手にかけるだろう。

なのに。

砂久弥は、何か……ひどく大切なモノを失った気がした。

もしも、此処に他の者が居たならば、砂久弥の様子に動揺や衝撃、まして悲哀など見出だす事は適わないだろう。

何事にも動じない男だと、その冷たい美貌に畏怖さえ抱くかも知れない。

だが。

勿論………女神は総てを知る。

もしも、女神が最初からそれを教えていれば、砂久弥の感情は定まる事は無かったかも知れない。

ヒラリスは単なる燕夜の敵としか、認識しないまま終わったかも知れなかった。

そして、万が一ヒラリスが燕夜を死に追いやったなら、砂久弥は当然の様に、ヒラリスを斬ったに違いない。

女神の存在は、時に強い毒になる。

神々の傍近くに仕える者は、心が麻痺して誰も愛せなくなる場合が多い。

丁寧に関心を導かなければ、恋も友情も、無自覚のまま摘み取られてしまうのだ。

神々はその瞬間を、無自覚の想いの種を、気付かない訳では無い。過ちも真実も、神々はいくらでも導く事が可能だった。

だがそれは、神々の娯楽として為されるのが常だったから、人間の心を護る為に手を貸す女神の存在は、非常に珍しいと云えた。

神々に心を奪われなければ、愛する家族や恋人を、失わずに済んだ人間は多い。

例えば、燕夜のように。

愛し子の苦しみを、リア・リル―ラは繰り返したくなかった。女神がそう考えたなら、それは確定事項なのだ。

そして砂久弥の心は、燕夜や紫蘭を愛する気持ちと同じくらい、新たな友人を大切だと認識した。

女神の眸が満足そうに瞬くと、周囲の空気が煌めいた。楽しそうに、祝福する様に。

「そなたも早呑み込みな所がある。」

「それでは……彼が生きている……と、そういう事でしょうか？」

思わず顔をあげ、砂久弥は女神の思惑など知らぬまま、縋る様に視つめた。扇の影から覗く、優しい眼差しに息を飲む。

人の思惑を読み取るのが得意な砂久弥だが、女神に対してその才能が働く事は無い。神々の考えが計り知れない上に、女神への畏敬の念が、そんな不遜をさせない為である。

故に、どんなに優しい微笑みを向けられても、言葉にされなければ、逆に安堵も出来ないという事になる。

砂久弥はヒラリスの安否を気遣い、思わぬ緊張を強いられた。

眼差しに笑みを含んだまま、女神が映像を指し示す。

映像は視点を変えて、崖を向こう側から映した。

すると、崖の淵から少しばかり下方に、小さな茂みが見えた。

急な崖に突き出たそこに近付くと、茂みの奥には人一人隠れる事が可能かどうかの、やはり小さな穴蔵が在った。

砂久弥は張り詰めた息を吐く。言葉にも表情にも出さないまま、強烈な安堵は、寧ろ心を乱した。

そこに映るヒラリスは、狼が去った気配に、茂みを掻き分ける様にして上を見上げていた。

今頃になって心臓が波打ち、砂久弥はそつと深く呼吸して息を整えた。

傍目には落ち着いた態度にしか見えないが、女神の眸には勿論そうは映らない。

砂久弥が女神の『美』^{チカラ}に、瞬きに眼差しに笑みに、どんなに心惹かれ動揺するかを知る。そして、常ならば全身全霊をかけて女神に集中する砂久弥が、今日はヒラリスの無事を気につけて、どんな風に心を乱したかを知る。

女神は人の結び付きが愛しい。
家族、友人、恋人、総ての愛情の有り様が、特にお気に入りだった。

憎悪さえ、彼女は愛しい。激しく熱い血を愛する。

今日の砂久弥の心の動きは、いつも以上に彼女を楽しませた。
常よりも砂久弥を愛しく感じて、リア・リルーラはクスクスと天上の音楽を笑声で奏でた。

「ヒラリスはそこでそなたを待つ様ですよ。安心なさい。」

唯一絶対の女神の言葉に、砂久弥は拝跪礼をとった。裳裾に口付けて感謝を述べる。

「リア・リダルテ。我が女神。貴女の美を讃え、貴女の優しさに感謝を。」

「私は何もしてなくてよ。」

リア・リルーラが微笑み。崖の映像が消え、元の景色が結界の外に広がる。

砂久弥は顔を上げ、美しい女神を視つめた。その眼差しは、常以上雄弁な賛辞と賛美を捧げていた。

砂久弥は未だ人間の籍を持つ。人の身で彼女を『見る』等とは、随分と恐れ多い事だが、彼女が下手な儀礼を嫌うのも知っていた。だから、逆説的なのだが、彼女に対しての礼儀は最低限に抑え、出来るだけ気を遣わぬ様に、気を付けている。

「いいえ、リア・リルーラ。麗しの女神。^{レイディ}貴女が命じずして、何故狼が退きましよう。普通の狼ならばともかく、彼らは銀の王子の僕でありますのに。」

銀灰色の狼たちが、妖精の意向を確かめずに獲物の傍を離れる事はない。考え得るのは、主である妖精の王子が膝を折る相手から、命令が為されたからに外ならない。

それは、確認する迄もない事だった。

リア・リルーラにしてみれば些細な事だと知ってはいるが、助けて貰い乍ら気付けぬ事も多々有るだろう。そう考えるのは苦しかった。

砂久弥は、常に女神の恵みに敏感で在りたいと念うが、こうして明快に解る形で気付かせて貰える方が稀なのだと気付いてもいた。言葉にして感謝を得る程の事も無いと、女神は思うのだろう。優しさの上に胡座をかいているのかも知れない。そう考えるのは砂久

弥を落ち込ませる十分な理由になった。

砂久弥は騎士で有りたかった。

己に、この高貴な女性を守る力など無いと知ってはいたし、それは恐れ多い程の高望みだとも思うが、希う事を止められない。

せめて、その御手を煩わす迄も無い些細な事ならば、自分が片付けたと思う。女神には『些細』でも、己には惨事を招き兼ねない『大事』だとしても。

女神が望まぬと知るから、下手な行動など起こしはしないが、心が望んでしまうのは仕方がない事だった。

砂久弥は、美しい主に少しでも役立ちたいのだ。

うつとりと、その姿に見惚れつつ、砂久弥は報告を済ませる。優しい声の響きに、震え上がる程の喜びを感じ、彼女の質問に答える。

そして指示を受け、彼はまた、深く頭を垂れた。

美は力だ。彼女のそれは圧倒的で、静かに震える程の笑みを撒く。力の奔流が零れ落ちて輝く光の粒子となって煌めいた。

圧倒的な美は圧倒的なチカラでも有る。彼女は他の神々を圧倒する美を力を誇る、最強にして至高の存在だった。

砂久弥は、その声に、姿に、吐息にさえも、時に目眩がする程、心を震わせる。その姿が直接、彼女本来のチカラを顕したなら、彼は息も出来なくなるだろう。

人間の姿に似ていても、まったく人間では有り得ない。

時に彼女は人間ヒトに化して人界に遊ぶが、その時ですら溜息つく程の美貌は隠し切れない。

砂久弥の前では神としての力を封じ込める事もしないから、眸を閉じていてさえ、砂久弥に負担を与えるに充分だった。

甘美な息苦しさ。

それは、快樂とも呼べるかも知れない。

紫蘭は悩んでいた。

自分の心の動きが制御出来ない。
こんな事は初めてだった。

だが、紫蘭は自覚する。

それが何に依って齎された事態かを。
自らが何に心囚われ、惑うのか、正確に把握していた。

——そう。私は彼を愛している。これが……恋と云うものなのだろう。

そう彼女は思い、嘆息する。

許されない想いだと考える以上に、自分の感情が恐かった。

燕夜が倒されでもしたら不倖だとは思う。だが、そんな心配は無用な筈だった。

彼はトウゼ王。ヒラリス王子が如何な勇者とて、彼を誅する事は出来ない。

それと知りつつ、彼女は願ったのだ。

ヒラリスの死を。

「彼を……嫌う訳ではないわ。」

そう。嫌いではない。どうして嫌えるだろう。

逢った事もない相手。今迄、何に於いても敵対した事もない相手を。

そんな男の死を……願った。

心が、勝手に暴走したのだ。

彼女にとって、それは初めての経験だった。

「……………そんな。」

恐ろしい……と思う。誰かの死を希求した事では無い。自分で自分の心を操れない事実が。

どんなに嫌いな相手であろうとも、彼女は愛し気に微笑いかける事が出来た。その逆もまた然りである。

それなのに、燕夜に関する事には、時に理性が飛びそうになる。

「今迄は、誤魔化せたけれど。」

いつ、その胸に飛び込んでしまうかも知れない。

そんな自分に、彼女は気付かざるを得ない。

口を極めて罵り、思い切り手を振り上げて相手の頬を打ち、服を掴んで、とにかく怒鳴って、身も世もなく泣き崩れたくなる。

あの男は、何故……何もしないのか。

例えば、無理矢理にでも事に及ぶ様な男ならば……軽蔑も出来ただろう。

だが。

彼は彼女が望まぬ事は何ひとつしない。

傍に寄る事を、最初に拒んだのは彼女なのに、そんな勝手な事を考えて、怒りに燃えた。

私の魅力に不足が有るとでも云うのだろうか？

せめて。

思い出くらい残してくれても……。

そうは思っても、すぐに否定する。

そうなれば、今度は単なる思い出にも出来ない、苦しむに決まっていた。

愛情表現は多少独特だが、彼女が燕夜を求める気持ちに嘘は無い。

「誰よりも……なのに……」

掠っておいて、口付けのひとつさえも、彼は求め様としない。

紫蘭の心は、初めて逢った時から、彼に繋ぎとめられていたのに。

15話 花嫁が掠られた日

「姫さま。紫梨花さま。国境が見えましたわ。あれは迎えの行列ではございませぬか？」

大人しくて気立ての良い砂良花すうらかが、淑やかに「けれど確かにはしやいだ風に紫蘭を呼んだ。」

気に入りの侍女の言葉に、姫は微笑したが、輿の中から外を覗き見る様な、はしたない真似はしなかった。

気にならない訳でも無いが、一緒に乗っている二人の侍女に対して、自らの印象を保つ事の方が大切なのである。

長椅子の上で沢山のクッションに凭れ、半ば横になりつつも羽扇で口元を隠す事を忘れない。楚々とした美少女は、正に王宮の奥深くで純粹培養された姫君以外の何者でもない。

もう一人の侍女は、その年若い完璧な貴人の美しさに溜息をつき乍らも、笑って砂良花に云った。

「姫君が覗き見などなさると思うの？」

「だって留亜那。え？」

拗ねた様な愛らしい口調が、息を吞んで途切れた。

「ひ……姫さま。黒い影がつ！」

こちらに戻しかけた視線を勢いよく外へ向けたと思えば、最早そっと覗き見るどころか、半ば窓仕切りの布を掻き分け、乗り出さん

ばかりにして慌てた声を出す。

その声は、けれど外の騒ぎに掻き消された。

紫梨花は扇の影で微かに眉をひそめたが、やんわりと砂良花に声を掛けた。

「何者か知りませんが、賊は兵士達が片付けましょう。そなたは、こちらにいらっしゃい。留亜那も、手が停まっていますよ。風を呉れるのでは無かったですか？」

ふうわりと、えもいわれぬ笑みを浮かべる姫君に、二人はハツとして従った。

落ち着いた笑みは、人を落ち着かせる力があつた。

「大丈夫。きっと……あら。」

彼女たちを落ち着かせる為の言葉は、途中でフツリと切れた。

二人は主の視線を追って、身を凍らせた。

輿の、唯一の出入り口に男が立っていた。

黒衣は軀に合わせた動き易いもの。マントも黒で、貴人が纏うに相応しい品に見えたが、如何にも軽そうに風に靡いている。

足首まで有りそうな丈のマントと共に、背中に届く闇色の髪も風に煽られ、その長身を飾っていた。

長い脚が、一步。前に運ばれた。

「そなた、無礼とは思いませんか。女ものの輿に乗り込む事もですが、礼くらい取ったらどうです。」

毅然として、なお優雅さを忘れない姫。

声すらも失った娘達は、ハッとして彼女の前に立った。

嫻かに見えても、王族の側近である。いざとなれば、敵兵を薙ぎ払い主人を護れるだけの技量は身に付けていた。

とは云え。

「二人とも、刃物を仕舞いなさい。外の者が余りに静かなのは、その男の仕業でしょう。何もせぬ内に眠らされるよりも、生きて報告をして欲しい。」

「姫さま……。」

「ですが…、この男が話を聞くとは限りません。」

彼女たちと五分に剣を交わせるのは、勇者の称号を持つ人間くらいだろう。剣士としての尊称を彼女たちは持たないが、腕だけなら將軍クラスの男にも引けを取らない。

その娘達が、姫君の声が響く迄、指先ひとつ動かす事も出来ず、恐怖に身を凍らせた相手。

確かに逃げる事も難しいだろう。

目的を果たした後、彼女達を生かしておくかどうか。

「そなた、目的は？」

「貴女を掠いに参りました。」

男は、その場では軽く騎士としての立礼のみをとり、姫君の前へと足を進める。

「二人共お下がり。」

「ですが！」

「姫さまっ!？」

不満と当惑の声に姫君は告げる。

「その男は私たちが話す間、動こうとしませんでした。今も……。話し合いの余地は有ると思います。おどきなさい。命令ですよ？」

確かに、男は彼女たちの結論を待つ風情である。

だが、娘達が刃を向けてまで、その紳士の態度が保たれるとは思われない。

「外の者が、すべて失われたならば、そなたたちだけが頼りです。」

二人は唇を噛み締め、憎悪に満ちた眸が美しい賊を見上げた。

スラリとした肢体は、昼の月光を背にしたシルエットのみでも眸を奪われたが、この状況でさえなければ、間近の彼の姿はまるで夜の神セルストの様で見惚れずにおれないだろう。

それは逆らう事を許さない力の証明でもあった。

それでも……いや、だからこそ、彼女達はその美さへも憎々しく思い乍ら、左右に別れ、道をあけた。

男は姫君の面前に跪き、貴婦人に対する最高礼をとった。

「トウゼ王。名は二人の時にお話ししましょう。」

「闇の王子……か。」

聞いていた二人の彼女は、上がりそうになった悲鳴を自分の手で封じなければ為らなかつた。

そうとなれば、彼は支配者の一人なのだ。

彼女達にとってセリカの王族以外に崇める存在は、世俗ではトウゼ王だけだった。

それは、東国のどの国の民でも同じ事だろう。

「では私も礼を尽くさねば為らないところですね。とは云え、この無法は貴方にも許される事とは思えませぬが？」

「姫君。恋に狂った男は理性など失くすのですよ。」

「……………私に恋をしたと？」

眉を顰めての問いには、笑って頷かれてしまった。

姫君は溜息をついた。

「では、私の願いを聞いて欲しいものですね。」

「それを叶えれば、ついて来て下さいますか？」

「出来るならば。出来ないなら、そのまま帰途について戴く事を約束して貰います。」

その言葉に、男は苦笑した。

だが、次の言葉に頷かざるを得なくなる。

「約束が得られないなら、私はどんな事をしてでも死にますが？」

「……………宜しいでしょう。」

姫君が挙げた条件は二つ。外に眠る人々の意識の回復と、二人の侍女に手を出さない事である。

あっさりと頷かれ、驚いたのは紫蘭である。

「貴方は、死者をも生き返らせる事が……………」

呆然とした声に、彼は微笑う。

「流石に、外に眠る人々が総て死者なら出来かねますが。」

「……………？」

「貴女に恋する私が、貴女を悲しませる事など出来る筈もない。皆、本当に眠っているだけですよ。」

その答えに彼女は安堵し、そんな自分の感情に狼狽した。だが、紫蘭は内心を秘めたまま、差し出された手を取ったのである。

トウゼ王が彼女を抱いて上空に浮かぶと共に、地上にはざわめきが戻った。彼等は、黒衣の魔法使いが姫君を連れ去るのを、為す術もなく見送るしか無かったのである。

時を取り戻した彼等と反対に、姫君に半日だけと約して、トウゼ王に眠りの魔法を掛けられた女性が二人。云うまでもない、姫君の侍女二人である。

その為に半日もの間、ヒラリスは姫君の行方を知る事が叶わなかったのである。

そう。

あの時。

人々が死んで無いと知らされた時。

彼女は彼と共に行く理由が出来た事を、確かに喜ぶ自分を知り戸惑った。

だが、その時は些細な問題だと考えた。

「この美しい王子と、暫く共に過ごすのも悪くない。」

そう思った程度である。

それが、少しずつ壊れていった。

最初は――。

トウゼ王と名乗った賊に掠われ空を飛んだと思ったら、いつの間にか、建物の中に立っていた。

何処かは知れないが、貴婦人の住まいするらしい室内だった。

「貴女の為に設しつえました。こちらでお暮くらし下さい。」

そう告げて、彼は紫蘭の手を取って、柔らかい長椅子に座す様に促した。

「美しい姫。改めて名乗りましょう。私は梨燕紫夜蘭。そう、貴女とは親族にあたります。」

驚きの色を掃く眸に、燕夜は微笑したまま続けた。

「曾祖父たる人に逢った事がお有りでしょう？」

「梨空絵お祖父さまは、退位なされてより滅多にセリカにはお帰りになりませんわ。私も幼少の折りに、ほんの二度ばかりお目見えした切りですから……。」

故に、記憶など殆ど無いと云いたげな口調だが、燕夜には通じない。

「警戒は不要です。梨空絵は我が父。貴女の祖父である梨影砂は弟です。私は、影砂に王位を押し付けて逃げ出した愚か者ですよ。」

自嘲を含んだその言葉に、少女は戸惑いを見せた。

「それは、……でも。貴方はお祖父さまよりも、随分とお若く見えます。」

トウゼ王ならば不思議な事では無いと知りつつ、少女は無知を装う。

燕夜は穏やかに返答した。

「時を止められておりますから。ところで姫君。貴女は私がどの様にして、貴女を見つけ恋をしたか……お知りになりたくは有りませんか？」

「……知りたく思いますわ。それより……私は、いつまで此処に在らねばならぬのですか？」

その言葉は媚びこそ含まないが、細い声が不安に揺れ、誇りを保つ姿が健気な程だった。

それなのに、燕夜は笑った。

「随分と気弱そうな風情をお見せになりますね。貴女を知らなければ、大抵の人間は騙されるでしょう。」

いつそ楽し気とさえ云える笑みに、紫蘭は戸惑いを見せた。

「何を……」

困惑して見せた紫蘭に、更に告げられた言葉は。

「私は貴女を視つめ続けて来ました。貴女の誕生より、ずっと、いつでも見ていましたよ。勿論。これからは、そんな事をしないと誓いますが。」

「……………」

「何故なら、貴女にお逢いたければ、こうして目の前に貴女の姿を拝見出来るのですから。」

歓びに満ちた声を聞き乍ら、燕夜の言葉をゆつくりと悩内にて咀嚼した紫蘭である。かみ砕かれた言葉は、理解と共に怒りを呼んだ。

では、自分の性格は相手に筒抜けな訳だ。

これが愚かな相手なら、誤魔化す事は可能かも知れないが、それは期待出来なかった。

燕夜は莫迦では有り得ない。

この男は、そう梨燕紫夜蘭。

「随分と、紳士らしからぬ真似をなさるのね。」

つまりは覗きと同じなのだ。

誤魔化す事も出来ないならば、怒りのままに云いたい事を告げても構わないだろう。

トウゼ王に対するには無礼かも知れないが、先に礼を逸したのは燕夜の方だ。

咎めるならば斬るが良い。

怒りと誇り高さが、紫蘭の眸にキツイ光を宿し、その輝きは更に燕夜を魅了した。

「そう。私は紳士では有りませんから。」

紫蘭の知る誰より優雅な物腰の男が、怒る紫蘭をうつとりと視つめて、あっさりと頷く。

怒りの発露にさえ見惚れる男に、紫蘭は呆れさえ覚えたが、それ

で怒りが収まる訳も無い。

ただ、傍で視つめたい。決して触れる事はすまいと、誓って掠つて来たた姫君に、燕夜は知らず手を延ばしていた。

「貴女は美しい。特に、誰も見ていないと油断した貴女の眸の輝きは、どんな宝石も敵わない。」

燕夜の掌が、少女の頬に触れた。

「きつと、誰もが魅せられるのは、貴女が垣間見せる……その眸の煌めきの所為も有るのでしょうね。」

そのまま両手が、少女の顔を挟んで上向かせた。

紫蘭は、燕夜の手の感触と、その眼差しの熱さに赤面した。

そんな自分に更に怒りを増した紫蘭である。

怒りに満ちた眸で、怒りに頬を上気させた少女の美しさに、燕夜は我を忘れた。

何より望んだ姫が傍に在る。その事実には舞い上がり、然しもの燕夜が自分を見失う程の歡喜があつた。

そして口付けを、思い切り拒まれた燕夜は、我に返り誓つたのである。

二度と、邪まな思いで彼女に触れたりはしない。

決して、彼女の前で自分を見失うまい。決して彼女の手以外に触れたりはずまい。

燕夜は誓って、それは今のところ守られている。

16話 夜闇の誘惑

誰より彼女を愛してる。

誰より彼女が欲しくて。

誰より、誰より、誰よりも――。

言葉を交わしたい、傍に居たい、笑顔が見たい、声を聞きたい、その手に触れたい、唇に触れたい、その肩を抱きたい、腰を引き寄せて……些細な事も、そうで無い事も、全てが誰に対するより彼女に向かう。

けれど。

だから。

燕夜は彼女に触れたり等しない。

燕夜は自らの手を見る。

嫌悪と後悔がその眸に浮かぶ。

ケガレ……を、そこに見つける。燕夜にしか見えないと知りつつ、黒髪が映える白い手を握り込む。

「こんな手が、姫に触れる事など許されはしない。」

冷たく凍る声が云う。

闇に浮かぶ顔は、うつすらと微笑した。

「だが、あの男にも触れさせない。」

黒の王子。夜闇の主が、支配下の闇に命じる。

「悪夢を、届けておあげ。あの男の連れに。彼までも……………傷付ける訳には行かないからね。」

蠢く闇が密やかにさんざめき、夜の森に去る。

燕夜は眸を閉じた。

「本当は、誰も愛しくなど無かった。」

自分は罪を犯した。誰も愛さない故に、弟を殺した。だから死にたかった。

要約したなら、それは何と陳腐な経歴だろう。

燕夜は自嘲の笑みに口元を歪めた。

しかも、更に陳腐なドラマは続いた。

皆を愛してると思っていた。だが、弟を死なせた瞬間、考えたのは「力」が…………被害を拡大させない事だった。

皇太子として、どう行動すべきか、それを先ず無意識に選択した燕夜。

苦悩して、死を望んで、得たのは「永遠」。

しかも、と燕夜は思いを馳せる。

永遠とわに続く筈の罰を生きる中で、愛する女性が現れた。

「これを陳腐と云わずしてどうする。」

燕夜は自らの滑稽を嗤った。

更に続いた愚かな道化は、我慢する事さえ出来ず、姫を掠いさえたのだ。

「だが。もう良い。私は姫を諦める事も出来ない。」

だから、ヒラリスには死んで貰う事にしたのだ。

姫は泣くかも知れない。

だが、倒されてやる事さえ、燕夜の「命」は赦さない。

ならば、ヒラヒラ王子に居なくなつて貰うしか無いだろう。

そして。

姫とずっと、此処に暮らすのも良い。

天上に愛されたヒラリスに「傷」を与えたと、罰を受けるのも良い。

姫の傍に在る事を望む燕夜にならば、今や死は希望以上に絶望だ。充分に罰となるだろう。

どちらでも良かったのだ。

どうせ、姫が燕夜を愛する日など、来はしないのだから。

トウゼ王に成り、預けられた東の塔である。もしそれが朽ちた塔だったならば、そのままに放置しただろう。

だが此処は美しく素晴らしい場所だった。だから、そのままの状態を保つ為に人も雇った。

何かしらの、積極的な意志など何処にも無い。ただ維持だけを目的としたものだったのだ。

彼が自分から望んだのは、紫蘭姫の部屋を設えた時が初めてだった。

そして、紫蘭姫の為に、その心を慰め喜ぶ顔が見たいが為に、少しずつ、燕夜は森の中での生活を変えた。

彼女は美しい。

それを感じする事は出来ても、永く心に響かない状態が続いていた。

美しいと、心が感動する。その事実は永年忘れていた。思い出せて嬉しいと感じた。

彼女を欲した。

何かを望む自分にも驚いた。

欲しくて堪らない気持ちになった。

その切なさ人間だった頃を思い出した。

まだ、本当に自分が「生きて」いたのだと実感した。

その頃の燕夜は、永く苦痛さえも忘れ果てていた。

喜びも苦しみも、最早感じる事は無いと思っていた。

ただ、暗く沈んだ後悔を、永遠に過ごす筈だった。

だが、紫蘭花は可愛い。綺麗だ。美しい。
育ち行く彼女を視つめ続けて、燕夜は微笑みを取り戻した。

時は過ぎ、少女は大人に成る。
より美しく、華やかに咲き誇り、嫁ぐ日が来る。

例えば、トウゼ王が求婚の使者を送ったならば、セリカは喜んで受け入れるだろう。

東の国々は、慶賀に湧くだろう。

だが……それで？

燕夜が紫蘭花を手に入れて、その結果は？

紫蘭花は、こんな男に嫁いで倅せになれるのか？

燕夜に、紫蘭花を手にする資格が有るのか？

否。否。否。

心に残る闇が、嘲笑う。

『さあどうした？愛する姫が有るのなら、闇の中に曳くが良い。愛し子よ遠慮は無用だ。連れておいで？』

付き纏う、夜の神が哄笑する。

最初に、闇が燕夜の前に姿を顕したのはいつだったろう。

「セルスト神。リー・セルスト。私は闇に仕える気は有りません。私の忠誠はリア・リルーラとリー・シエンに捧げられたもの。」

「嘘だな。ならば私は此処に顕れる事すら出来ない筈だ。」

「嘘では有りません。」

「リアは構わぬよ。あの方は我らの女神でも在られる。だがそなたの忠誠は月に有るのでは無い。故にシ・エンには縛られない。ソナタは闇を求めている。」

夜の神々が燕夜を訪れ誘惑しても、燕夜が受け入れる事は無かった。

光を受け入れないのでは無い。

何も受け入れる気が無いだけだった。

苦痛や不倖を撒き散らしたい訳でも無い。

己が罰を欲しただけだ。

「ならば罰を授けよう。どんな苦痛も思いのままだ。」

既に罰なら享けていた。

苦痛さえ与えられない現在こそがソレだった。

燕夜は苦痛に逃げる気は無かった。

淡々とトウゼ王としての職務を熟す燕夜を、しかしセルストは気

に入ったらしかった。

夜闇の神が、昼の月が輝く時間にまで訪う様になるのに、然したる期間はおかれなかった。

「今は昼間かと思いましたが。」

『影は何処にでも在る。人の心にも闇が在る。』

うんざりと尋ねればニヤリと返された。

付き纏う闇の誘惑に、だが燕夜は無関心だった。
当たり前の様に傍らに在るものと、じきに認識した。

流石に、主月神やリア・リルーラが顕れる時は、姿を消したが、
ソレが常に傍に存在するものと、燕夜が気付くのに時間は掛からなかった。

「そう。そなたの認識に間違いは有りません。」

リア・リルーラも頷いた。

月の輝きに影は薄くなる。

現実も、心も、光りに包まれる。

声が届かなくなるだけで、見えないだけで、ソレは消えた訳でも無いのだ。

あくまでも、そこに「在る」。

『そなたの心に闇が残る故に、私はそなたを愛するのだ。』

とは云え。

セルスト自身が構いつける人間もまた珍しいらしく。

「また面倒なものに好かれたものですね。」

女神は嘆息し。

「そなたが領かないなら別条問題は無い。」

主月神は笑った。

領いたなら、月神も介入が難しくなるとも云われ、決して試しに誘いに乗ったりはしない様に釘を刺された。

もとより領く気など無い。

だが、セルストに愛された燕夜は月の魔力と共に、闇の力も強くなる。

夜闇は燕夜の友となり、ソレは存外敏感な人の世では呼称となつて表れた。

黒の王子。

夜闇の魔導師。

東の魔王。

煌めく東是王の名が、禍々しい呼称に隠れ、ソレは申し訳ない事

と月の女神に詫びた燕夜であつた。

女神はただ微笑むのみ。

美しい、愛しい、可愛い、欲しい………

心が欲と希望を取り戻し、寝ぼけた様に燕夜の周囲を取り巻いていた闇の神々は、活発に動き出した。

囁き、笑いさざめく。誘惑を再開して。燕夜の夢にまで侵入を果たした。

『燕夜。』

「姫！？何故ここに！？」

最初は取り乱しさえした燕夜である。

今では一言。

「寄るな。」

斬って捨てる。

姫の姿にも、動じる事はない。
少なくとも表明上は。

姫を汚された気がして、嫌悪が募るばかりだった。

『似てないかな？』

「その声もやめろ。」

冷やかな眼差しに、セルストは姫の声で笑う。

『おお怖い。いきなり斬り付ける事は無いだろう？』

セルストは燕夜から距離を取り、左手を翳して見せた。

不審そうに眉を寄せる燕夜に、ニイと姫の唇が下品な迄の笑いを作った。

カチリ、鞘を鳴らす燕夜に、セルストは更に距離をとり。

隣には一人の男が姿を現した。

「人間？いや、人形か。」

『そう。お人形だよ。これは西国クルトのヒラリス王子。……の、す、が、た。』

ヒラリスの人形が、姫のセルストの腰を抱く。

燕夜は剣を振り上げた。

ヒラリスが姫を抱き寄せ、のけ反る咽に口付けた。

肩から落ちる布。

そして、瞬間に消えて、地面には燕夜が投げた剣が刺さる。

哄笑が響く。

『そなたが否定しても、今のままならそうなるぞ？ほら、もうじきだ。じきに姫の行列が国境に差し掛かる！』

哄笑はセルストの声になり姫の声になり誰とも知れぬ男のものとなった。

それがヒリスの声だと、察知したのは、セルストとの付き合いの永さか、恋する男の本能と云うべきか。

白昼夢より目覚めた燕夜は、東の塔より姿を消して、次の瞬間には紫蘭花の行列を眼下に映していた。

段取りを無視した求婚に、姫が応じる訳も無い。

我慢出来ないならば、最初から求婚していれば良かったのだ。

だが、燕夜はセルストの挑発に乗ってしまった。

とは云え、これ以上惑う積もりは無い。

そう考え乍らも、姫を目の前にすれば揺らぐ心がそこに有る。

彼女の笑み。彼女な言葉。彼女自身の声。彼女の仕種。

すべてが愛しく。すべてが燕夜を変えていく。

「愛しています。」

燕夜は告げるが、応えて貰えない事は承知していた。
事実、冷たい眼差ししか返される事は無い。

それでも花に罪は無いとばかりに、捧げ物には微笑んでくれたりもする。

美しいものが好きな紫蘭花の為に、燕夜は美しいものを取り揃えた。セリカの地で、一流の物に囲まれて育った彼女を満足させる程の「モノ」を、彼は懸命なまでに探索した。

彼女に応えて貰えたならば、自分は昔に還る事が出来るだろうか？
そんな事を考えもした。

有り得ない事だ。

そうも考え、自らを嘲笑った。

だが、誰も愛さなかったのが「罪」ならば、現在姫を愛する事実
は「何」になるのだろう。

彼は考える。

もしも……と。

万が一彼女が自分を愛するならば、人生を変える事も出来るだろう。

美しいモノが好きな彼女が自分を好まないのは、自分の中のケガレを敏感に察知するからでは……と、燕夜は感じた。

だから彼女の為に。

彼女が応えてくれたら。

やり直したい。

燕夜は心の奥底で祈る様に願い、けれど叶わないと知っていた。

何故なら。

『莫迦だなあ。云っただろう？闇に曳き込め。仲間にしてごらん。纏めて可愛いがつて上げるよ。』

「失せる。」

冷やかに燕夜は告げる。

姫に出逢うまで、セルストを忌むべきものと考えた事は無かった。

自分自身の事など、どうでも良かったからだ。

しかし、こんなモノに愛し子扱いされる自分が、姫に相應しいか。そう考えたら答えは決まっていた。

領かなければ問題は無い。そう云われはしたが、現実には姫は自分を嫌っている。

その事実が燕夜を苦しめ、よりセルストを深く呼び込んだ。

姫を掠った激情を煽られた日を思えば、今度は姫を傷付ける事さえするかも知れない。

自分自身の理性が信じられないならば……自分を滅ぼすしか無いではないか。

そして、仮にも神に列なる燕夜を滅ぼす力は、ヒラリスには無い多分。

砂久弥ならば為し得るだろうが、砂久弥はそうしてはくれないだろう。

燕夜は微笑した。

永く友と呼びつつ、こんなにも温かい気持ちを抱いた事は無かった。

「済まないな砂久弥。ヒラリスは貰う。」

そう。

神々が自分を滅ばさないならば、砂久弥がそれをしてても良い。

ヒラリスの仇を討つ為ならば、砂久弥も本気になるかも知れない。

姫にも、砂久弥にも、申し訳ないと思う。

だが。

ヒラリスが存在するならば、燕夜は自制に自信が持てず。

自分が滅びる為にもヒラリスの死は不可欠ならば。

「死んで貰うしかないだろう。」

『そうだ。邪魔なものは片付けてしまえば良い。わかって来たでは無いか。なあ？』

「失せろと云った筈だ。」

燕夜の手にはいつの間にか剣が握られていた。

横薙ぎに払えば、セルストは笑声を残して消える。

最近は頓に頻繁に顛れる。

燕夜は眉を寄せた。

——リア。こんな状態でも、私を生かすのですか？

もしかしたら、ヒラリスの死さえ、燕夜は罰される事なく生かされるかも知れない。

女神が命じれば、砂久弥も、何もしないかも知れない。

ずっと。

姫と二人で。

この塔に暮らせるのかも知れない。

暗い喜びに燕夜は苦しくなる。

姫には倖せになって欲しい。

姫を誰にも渡したくない。

ヒラリスが居なくなっても、燕夜さえ居なければ、姫なら次の倅を掴む機会はいくらでも有るに違いない。

だが。

自分が残るなら？

不安は、しかし苦笑に変わる。

この短い生活の中で、姫は順応してソレなりに楽しみを見つけている。

愛さなくても良いから、逃げない事だけを誓ってくれば良い。

燕夜は微笑んだ。

申し訳ないと思うが。

生き残るならば、燕夜は姫を手放す積もりは無かった。

きつと。

彼女は何だかんだで楽しく暮らしてくれる。

「遅しい女性だから。」

息苦しさに、壁に背を凭れ、緑に溢れる外界を眺めた。

——誰が決めたのだろう。

普通なら、トウゼ王たる燕夜が望まない限り、誰も立ち入る事は

出来ない。

しかし、燕夜が姫を掠った途端。この結界にはひとつの綻びが生じた。

姫を、奪還しようとする「モノ」にだけ、緩んだ結界。

——リア。貴女の世界への関与の仕方は……………正直意味が解らない。

結界が緩んで、ヒラリスが来ても、ヒラリスが燕夜に勝てる訳も無い。

——なのに、何故。

闇が薄くなり、燕夜は楽になった呼吸に吐息する。
ヒラリスを憐れんでも、負けてやれる訳でも無いし、その気も無い。

闇に染まる度に苦しくなる呼吸も、対処の仕方は理解している。

「燕夜？」

回廊に佇む燕夜に訝る声が掛かる。

ふっと軀が軽くなり、現金な事だと自嘲した。

「何をして……………気分が？」

「ご心配…下さるのですか？」

嬉しそうに微笑む燕夜に、紫蘭花は眉を顰る。

「少し、目眩がしましたが、楽になって来たところです。」
「そのようね。」

姫の声に冷ややかな響きが戻り、燕夜から距離を取った。

燕夜は両足に体重をかけ、凭れた壁から背を離す。

ゆったりと姫に求婚者の礼をとれば、冷たく見下ろす眼差しがある。

「何かご用はございませんか？」

「不要です。暫く貴方の顔は見たく有りません。」

硬く凍る声さえも美しいと燕夜は思う。

「消えて下さる？」

「御意のままに。姫君。」

燕夜は姫の言葉通り、その場から瞬間にして掻き消えた。

故に、残された姫の眸に揺れる感情を、燕夜が気付ける筈もなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6208x/>

～猫被り姫に魔王退治の王子様～

2011年12月27日16時57分発行